長野県東筑摩郡波田町

葦原遺跡 II

緊急発掘調査報告書

波田町教育委員会

長野県東筑摩郡波田町

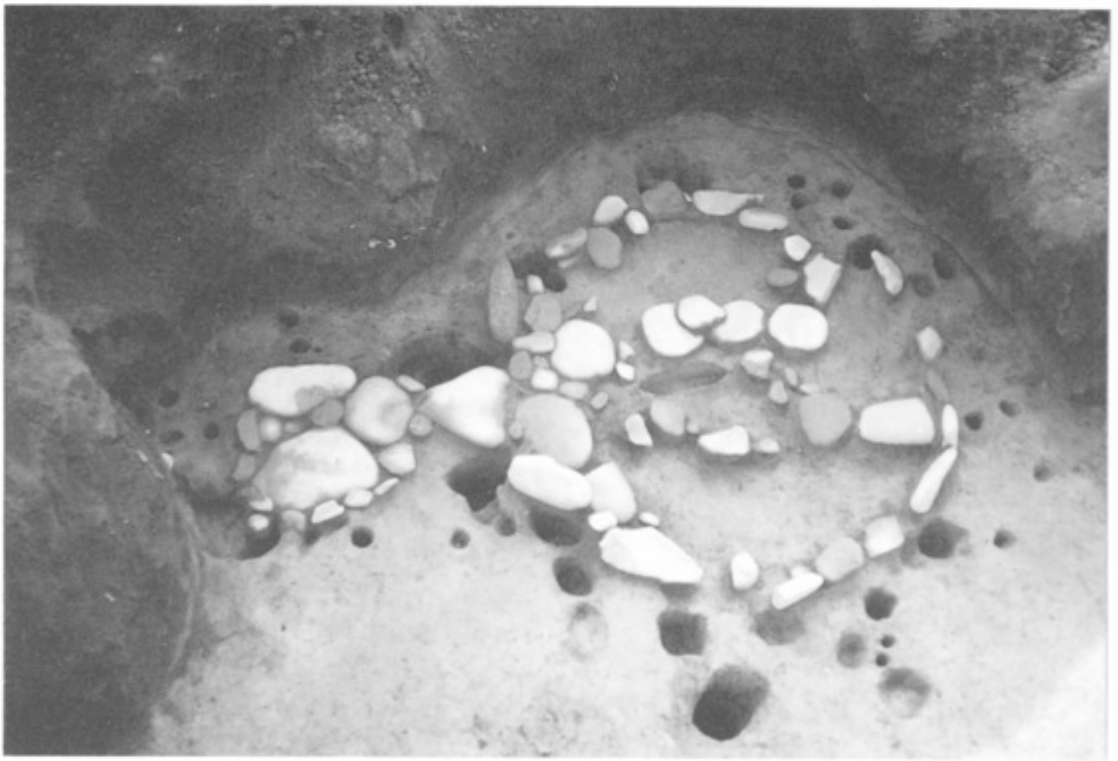
葦原遺跡 II

緊急発掘調査報告書

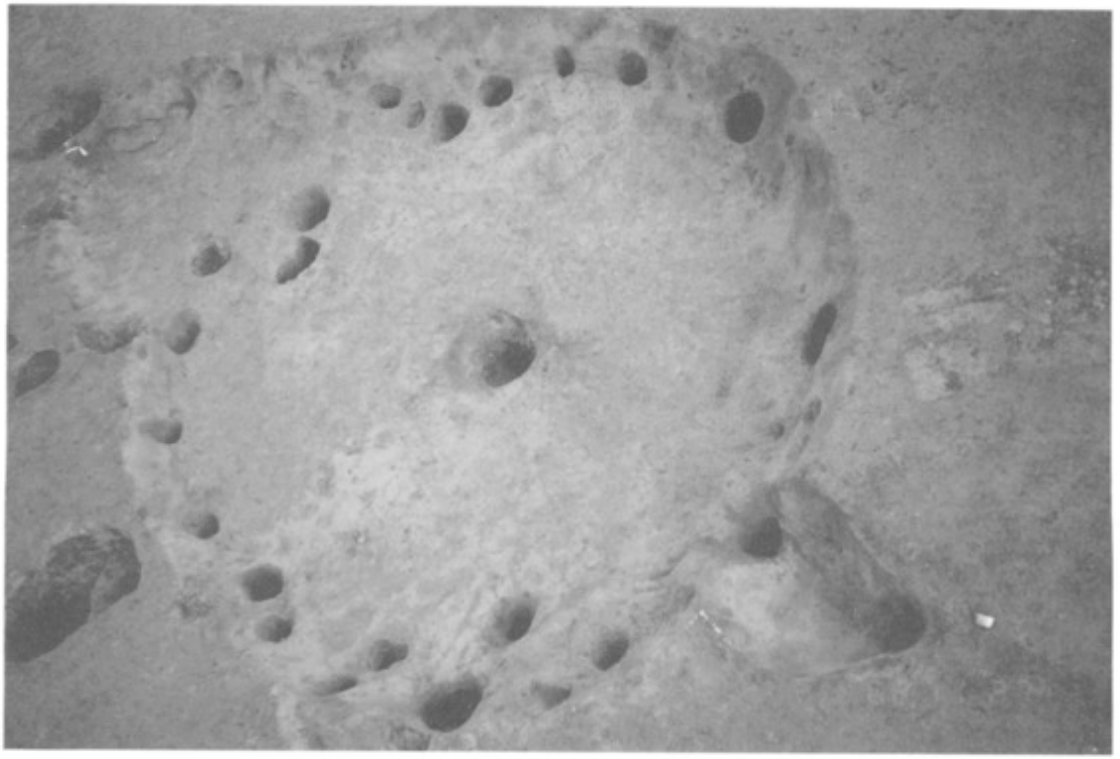
波田町教育委員会

全　景（東→西）

発掘風景



第３号住居址（敷石）



第１号住居址

21号土坑出土土器

例　　言

1．本書は、1990年11月12日から11月28日にわたり実施された長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡の緊急発掘報告書である。

2．本調査は葦原地区の共同集合住宅造成工事に伴う緊急調査であり、波田町教育委員会が調査を行った。

3．葦原遺跡は現在までに、松商学園高等学校により12回、波田町教育委員会により１回の発掘調査が行われている。

4．本書は大久保知巳指導のもと調査員が分担執筆した。

5．本発掘調査に関する遺物及び図面類・実測図・写真・書類などは波田町教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　調査経過……1

第１節　調査に至るまでの経過……〔事務局〕1

第２節　調査日誌……〔事務局〕2

第２章　波田町の遺跡……3

第１節　波田町の遺跡分布概観……〔青　沼〕3

第２節　縄文時代の遺跡……〔青　沼〕6

第３節　弥生時代の遺跡……〔青　沼〕7

第４節　平安時代とそれ以降の遺跡……〔青　沼〕8

第３章　調査結果……9

第１節　発掘地の概要……〔大久保〕9

第２節　遺構と遺物……〔大久保〕10

１．住居址……10

(1)　第１号柄鏡型竪穴住居址……〔大久保〕10

(2)　第２号竪穴住居址……〔三　村〕13

(3)　第21号土坑……〔三　村〕16

(4)　第３号敷石住居址……〔三　村〕23

２．土坑・ピット……〔大久保〕30

３．その他……35

(1)　自然流路……〔大久保〕35

(2) ローム マウンド……〔大久保〕36
(3) 焼土遺構……〔大久保〕41
(4) 集石遺構……〔大久保〕41
第3節 遺構外の遺物……〔三 村〕42
第4章 結 語……〔大久保〕43

第1章　調査経過

第1節　調査に至るまでの経過

葦原遺跡は、縄文時代の非常に密度の高い遺跡で、県の重要埋蔵文化財包蔵地とされている。過去に松商学園高等学校により12回、波田町教育委員会により1回発掘調査が実施され、貴重な資料が多数発見されている。

この周辺は、近年住宅化が進行し葦原遺跡の区域内にも住宅開発の波が及んでいる。

平成2年8月、地主の中野永子さんより、共同住宅建設のための宅地転用許可申請が出され、地主・県教育委員会・町教育委員会による協議の結果、建物の下となる350㎡の記録保存をすることとなり、波田町教育委員会が主体となり、この緊急発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査にあたっては、調査団長に大久保知巳先生をお願いした。各地で発掘調査が実施されている中、指導していただいた調査員の先生方には、それぞれ本務及び他の調査の仕事などをお持ちの中で調査を実施していただき、心から感謝申し上げます。とりわけ、全日程を通してご指導いただき、報告書の発行を見ずに他界された百瀬陽三先生には心よりご冥福をお祈りいたします。

また、調査にご協力いただいた住民の皆さん、地主の中野さん、地元の皆さんには、発掘調査が無事終了することができ厚くお礼申し上げます。

発掘調査のための組織は次のとおりである（平成2年発掘当時）。

波田町葦原遺跡調査会

会　　長　教育委員長　中野義治
副 会 長　委員長代理　大月仔一郎
　　文化財保護委員長　田中昭三
委　　員　教育委員　振旗晴文
　　上村美枝子
　　教育長　松澤富基夫
　　文化財保護委員
　　塩原敬一郎　中嶋章喜
　　太田戸久衛　百瀬光信
　　大月康雄
事務局長　教育長　松澤富基夫
事 務 局　教育委員会　下見由人
　　牛丸忠夫

波田町葦原遺跡発掘調査団

団　　長　大久保知巳
調 査 員　百瀬陽三　三村肇　青沼博之
調査補助員　田中昭三　大月康雄　中嶋章喜
　　太田戸久衛　塩原敬一郎　百瀬光信
　　中野義治　大月仔一郎　振旗晴文
　　上村美枝子
調査協力者　中嶋俊英　山口琴三　百瀬二三子
　　上條道代　伊藤さな江　百瀬兼雄
　　中嶋一郎　吉江幸子　塩原久和
　　高野昌英　安田国益　小林寿子
　　滝沢地加江
　　平林　彰　綿田弘実　大沢真二
　　宮嶋洋一
（教委）　川澄恵美子　深沢洋子
　　深沢久幸　八田洋樹

第2節　調査日誌

平成2年11月

12日　調査開始。調査区東側より重機による表土除去作業。基準杭の設定。

調査区中央やや東寄りの耕作土の下、包含層より磨製石棒出土。

13日　中央部の表土除去作業。全体の2/3まで排土作業終了。

14日　表土除去終了。地山は西及び北側がわずかに高め、南にやや傾斜する。遺構検出作業開始。

16日　中央部がやや高いので西側よりさらに掘り下げ。全面遺構再検出。

集石部の洗いだしと住居址の掘り下げに入る。

17日　柄鏡状遺構ベルトを残して掘り下げ。埋土中土器片多数平坦な床部より1号住居址とする。

北東隅の焼土遺構、下部に住居址確認、2号住居址とする。二重遺構とみられる。

18日　1号住土層実測終了、ベルト掘り下げ。2号住焼土部実測、十字ベルト残し掘り下げ。

1・2号土坑はロームマウンドと判明。

19日　2号住居址中央中層より完形の縄文中・後期土器出土。二時期の切り合いと思われる。

土坑列調査。集石遺構、集石下掘り方なく石捨て場と判断する。

20日　2号住居址西側の落ち込みを二次住居址と判断する。

21日　1号住居址、遺物取上げ床面施設の精査。柱穴全周にまわり、張り出しは西のみで東の柄部は別遺構とみなす。自然流路完掘、マンガン酸化鉄沈澱あり。

22日　2号住居址遺物等の平面実測。北壁基本土層の実測終了。

24日　2号住居址西半分深く落ち込み、溝状遺構が2号住を切る。ベルト残し掘り下げ。

土坑5調査範囲を広げ全体調査、柄鏡形敷石小形住居址が現れる。3号住居址とする。

25日　各遺構の精査。

26日　2号住居址を切る土坑を土坑21号とする。完掘。住居址柱穴等完掘。実測終了。

28日　完掘写真、全体写真撮影。

第２章　波田町の遺跡

第１節　波田町の遺跡分布概観

昭和47年に緊急発掘調査が行われた麻神遺跡の報告書中の町内遺跡分布図に36地点が示されているが、「波田町誌」ではそれらをもとに、遺跡群としてとらえられる遺跡を統合し、18の遺跡にまとめている（第１図、表１）。本稿は町誌に従い記述しているので、各遺跡、遺物、時代についての詳細は同誌を参照していただきたい。

町内を北西から北東に梓川が形成した河岸段丘と、西の山塊から流れ出た唐沢川・中沢川が形成した扇状地が発達し、遺跡の立地に適した地形が広がっていることから未発見の遺跡の所在も考えられ、今後遺跡数は増加するものと思われる。

遺跡の分布状況を見ると大きく四群に分けることができる（第１図）。Ⅰ群は、下三溝から下島にかけての梓川右岸第二段丘縁辺部上に東西に細長く位置する群で、規模の大きな４遺跡が立地している。Ⅱ群は唐沢扇状地の中腹部に広がる遺跡群である。10遺跡が立地し、波田町における半数以上の遺跡が集中する最大の遺跡群である。上波田から上高地線新島々駅にかけての、南に山を背負う梓川右岸段丘上にⅢ群が立地する。遺跡数は３遺跡と少なく、遺跡規模も小さい一群である。

この三群より東に大きく離れた地点にⅣ群の下原遺跡が立地している。南に隣接して山形村の三夜塚遺跡が広がっており、三夜塚遺跡群の一角としてとらえておきたい。

これらの大きな遺跡群を、「波田町誌」自然民俗編の『波田町の井戸分布図』に重ねあわせてみると、Ⅱ群が井戸の分布箇所と合致している。井戸の存在は湧水の存在にもつながることから、これらの遺跡が立地した場所は生活に欠かせない水が得やすい場所であったことを示している。Ⅲ群の３遺跡が立地する範囲には１遺跡をのぞき井戸の存在はない。しかし、３遺跡が立地している場所には南の山から小河川が流れ出ていることから、やはり生活用水の得やすい場所が選ばれていたことがわかる。

18ヶ所の遺跡を時代別に見ると、縄文時代16、弥生時代５、古墳時代１、平安時代８、中世５の延35遺跡となる。縄文時代の遺跡がほとんどを占め、次いで平安時代、弥生時代の遺跡が続く。このことは、縄文時代と平安時代に人々の生活が盛んに営まれた事を示しており、全県的な傾向と一致する。

（青沼博之）

第1図　波田町遺跡分布図

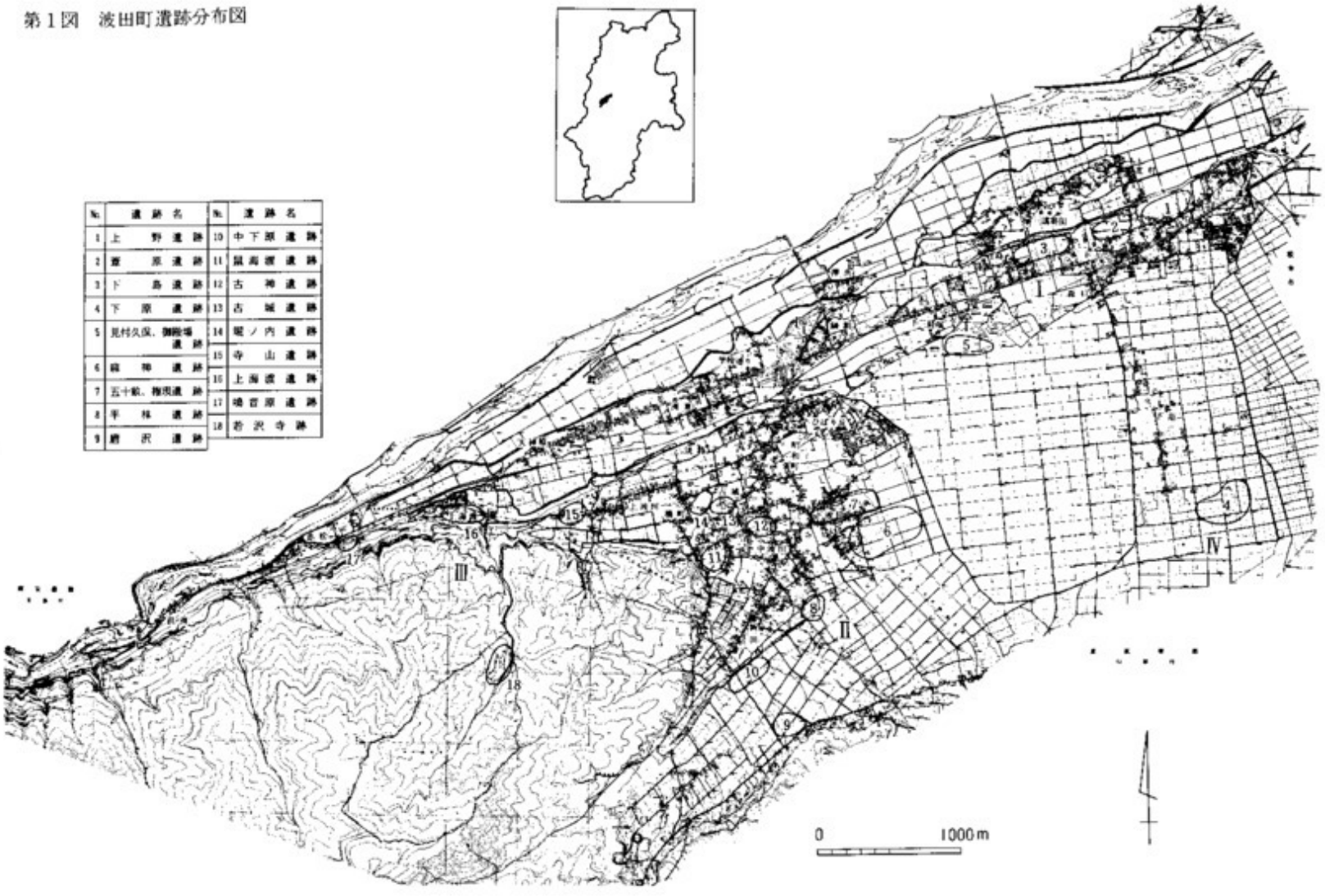


表1　波田町遺跡地名表（波田町誌より作成）

No.	遺跡名	縄文時代						弥生時代			古墳	平安	中世	備考（発掘調査）
		早期	前期	中期	後期	晩期	不明	中期	後期	不明				
1	上野			○		○							○	
2	葦原		○	○	○							○	○	昭和39～54、平成3
3	下島		○	○							○	○		平成2
4	下原			○						○		○		
5	見付久保、御殿場			○								○		
6	麻神		○	○	○	○		○						昭和46、47
7	五十畝、権現			○	○									
8	平林			○						○		○		
9	唐沢		○	○										
10	中下原			○	○									昭和56（破壊後確認）
11	氣海渡			○										
12	古神							○						
13	古城			○					○			○	○	耕作時に石囲炉発見
14	堀ノ内			○										
15	寺山		○	○								○		昭和42年頃試掘
16	上海渡			○		○						○	○	
17	鳴音原						○							
18	若沢寺跡												○	
合計	時期別延数		5	15	4	3	1	2	1	2	1	8	5	
	時代別延数	28						5						

第２節　縄文時代の遺跡

縄文時代は、初めて土器が作られた約１万２千年前から始まり、草創期・早期・前期・中期・後期と続き、約２千３百年前の晩期まで、約１万年の間続く長い時代である。

波田町で現在までに発見された最も古い遺物は縄文時代前期（６千～５千年前）の土器片で、葦原・下島・麻神・唐沢・寺山の５遺跡から関西系土器片、諸磯ａ～ｃ式土器片、神ノ木式土器片、下島式土器片が採集・発掘されている。しかし、その量は少ないことから、大きな集落の存在はうかがえず、小規模な集落が点在していた程度と思われる。

隣接する山形・朝日・梓川村からは、約１万年前の草創期に属する有舌尖頭器が発見されていることから、今後波田町においてもこの期の遺物が発見される可能性はきわめて高く、波田町の歴史は更にさかのぼるものと思われる。

中期になるとその様相は一変する。ほとんど全ての遺跡から土器・石器を中心とした遺物が採集・発掘され、縄文中期初頭から後半の各期にわたる土器や石器が多量に出土し、土偶や石棒、土鈴等の信仰に関する遺物も多くなる。その中でも特殊な遺物として、波田町字権現塞から発見されたとされる全国的にも珍しい土面が、明治37年発行の「東京人類学雑誌」に発表されている。また、葦原遺跡から類例の少ない土製スプーン、麻神遺跡から底部穿孔の土器も発見されており注目される。

このように縄文時代中期の遺跡が急増するのは、縄文早期末に始まった地球の温暖化により、中部高地はドングリ・クリ・クルミ・カシなどの植物性食料を豊富に提供する地となり、それらを求めて人々が移り住んできた結果といわれている。

中期の遺跡の中でも、葦原・麻神・下原・中下原の４遺跡は過去の調査や採集される遺物の量・質とも群を抜いており大きな集落が営まれていたことを物語っている。

葦原遺跡は、松商学園高校が中心となった発掘調査が、昭和39年から12次にわたって行われ、また、町教委により２回の緊急発掘調査も実施されている。その結果、中期竪穴住居址24軒、中期末から後期にかけての敷石住居址４軒、後期平地式住居址１軒、土坑等が発掘されており、波田町最大の遺跡であることがわかってきている。また、平安時代の竪穴住居址１軒、中世の土坑、集石遺構と遺物も発見されており、長い期間住み続けられた遺跡でもある。

麻神遺跡も、昭和46・47年に２回の緊急発掘調査が行われている。中期竪穴住居址14軒の他多数の土坑や遺物、中世遺構・遺物も発見されており、葦原遺跡と同様に大きな中期集落が営まれ、中世まで続いた遺跡である。

唐沢扇状地の中下原地籍で、昭和56年土地改良工事が行われた。その際、縄文中期から後期に属する竪穴住居址が中沢川に添った地点の掘削部分断面で11軒、土坑14基のほか多量の遺物等が発見された。遺跡は破壊されてしまったが、ここにも縄文中期の大きな集落が存在していた事がわかる。

山形村三夜塚遺跡群に属する下原遺跡も、その採集される多量な遺物から大集落が存在したことが裏付けられる。

大きな縄文中期集落が営まれていたこの4遺跡を隔てる距離は、それぞれ約2㎞～3㎞ある。このことは、山形村の中期の大きな集落である殿村遺跡・洞遺跡を加えても同様なことが指摘でき、2～3㎞に一つ大きな集落が営まれ、その周辺に小規模な集落が造られていたのではないかと思われ、直径2～3㎞の範囲がその集落のテリトリーであったことが想像できる。しかし、これは現在までの調査結果からの推測であり、その内容については十分に検討していない。今後この地域での発掘調査資料が十分蓄積されてから後再考したい課題である。

縄文時代後期になると遺跡数は激減する。葦原・見付久保・麻神、権現・中下原遺跡の5遺跡のみとなり、採集される遺物の量からも大きな集落が営まれていたとは考えられない。これは、気候の寒冷化により、中部高地に豊富にあったドングリ・クリ・クルミなどの植物性食料の確保が困難になったためといわれ、長野・山梨県等中部高地全域にわたって見られる傾向である。

これらの遺跡からは、堀ノ内式土器、称名寺式土器等後期前半から後半の土器片が採集・発掘されている。

しかし、松商学園により発掘調査され、中期末から後期にかけての敷石住居址4軒が調査された葦原遺跡の存在は注目される。今回の調査で更に柄鏡形敷石住居址1軒、竪穴住居址2軒が追加されたが、中期末から後期にかけ葦原遺跡はこの地に存続した中心的集落であった事がうかがえる。

松本平で柄鏡形敷石住居址が発見されているのは、大町市の一津遺跡で5軒、穂高町離山遺跡で4軒、同新林遺跡1軒、梓川村荒海渡遺跡で2軒、明科町ではほうろく屋敷遺跡9軒、塩田若宮遺跡1軒、こや城遺跡4軒、北村遺跡28軒と一番多く、松本市からは、林山腰遺跡1軒、弥生前遺跡3軒、坪ノ内遺跡8軒、牛の川遺跡1軒、塩尻市で柿沢東遺跡1軒、平出遺跡2軒、御堂垣外遺跡4軒、総計16遺跡で、78軒が調査されている（㈱長野県埋蔵文化財センター平林彰調査研究員教示）。

その特異な平面形や大部分が敷石される事、作られた時期が縄文時代中期末から後期にかけてを中心とした限られた時期である事、関東地方から東北南部、中部高地と限られた地域のみに分布する事等、柄鏡形の敷石住居址は種々の特異性を持っており、それらについての定説はまだ出されていない。本葦原遺跡から発見された小型の柄鏡形敷石住居址はその問題解決に新たな資料を提供した事になろう。

後期になると遺跡数が激減する事は前述したが、この傾向は晩期になるとさらに顕著となり、麻神・上野・上海渡の3遺跡が存在するのみである。また、採集されている遺物も若干の土器片だけであるが、時期がわかる土器片では麻神遺跡から氷Ⅰ式土器片2片が出土している。

（青沼博之）

第3節　弥生時代の遺跡

波田町内の弥生時代遺跡には、下原・麻神・平林・古神・古城の5遺跡がある。遺跡数は縄文後・晩期より増加しているが出土遺物は少なく、大きな集落は存在していなかったことが推測される。

波田町誌の遺跡地名表によると、竪穴住居址が下波田、古城遺跡から発見されている記載があるが、本文中では触れられておらずその詳細については不明である。遺物では中期土器が麻神、古神遺跡から、後期土器が古城遺跡から出土しており、石包丁が平林遺跡から出土している。

第4節　平安時代とそれ以降の遺跡

弥生時代に続く古墳、奈良時代の遺構・遺物は全くといっていいほど発見されておらず、空白時期となる。しかし、1点ではあるが、梓川高校に下島遺跡から出土した和泉式の甕が保存されている事から、5世紀代には波田町に人々の営みがあった事が知れ、小規模ながら集落が営まれていた事が推測される。

また、これより時代は降りるが、山形村には8世紀初めに築造された古墳時代終末期の大久保古墳群、殿村古墳がある事や、松本市との境である上高地線新村駅周辺に、安塚、秋葉原古墳群がある事、波田町平林地籍の南縁に数基の円墳が存在したとの土地の古老の話もあるようで、波田町でも今後煙滅した古墳が発見される可能性はあろう。

縄文時代に最大だった遺跡数は、時代が下るとともにその数を減ずるが、平安時代になると再びその数が増加する。これは全県的な傾向でもあり、開発が各地で進められていった結果といわれている。

波田町の平安時代にかかる遺跡は、葦原、下島、下原、見付久保・御殿場、平林、古城、寺山、上海渡の8遺跡で、町内全域に分布している。

この内竪穴住居址が発見されている遺跡は、葦原、寺山の2遺跡であるが、記録等残っていないためその詳細については不明である。しかし、寺山遺跡のそれは、方形の平面プランを持ち、柱穴はなく、北東壁隅に石組の粘土カマドが構築されていたとの事であるので、松本平の発掘例と比べてみると11世紀後半頃の住居址と思われる。葦原遺跡の竪穴住居址も同時期のものと考えてよいであろう。

出土地で確定できないが、波田中学校に寄贈されている灰釉陶器、土師器小型甕も同時期のものであり、これらの事から、11世紀後半松本平西部山寄りに開発の波が進み、集落が営まれていた事がわかり、隣接する山形村、朝日村等でも発掘調査により確認されている。

中世の遺物が採集されている遺跡に、上野、葦原、古城、上海渡、若沢寺跡の5遺跡がある。この内、葦原遺跡から土坑2基、集石遺構1基が松商学園により発掘調査されており、昭和55年に行なわれた土地改良事業に伴う緊急発掘調査でもこの時期の遺構・遺物が発掘調査されている。その数は少ないながらも、若沢寺跡との関係も含め今後の波田町の中世を知る上で貴重な資料を提供してくれている。

（青沼博之）

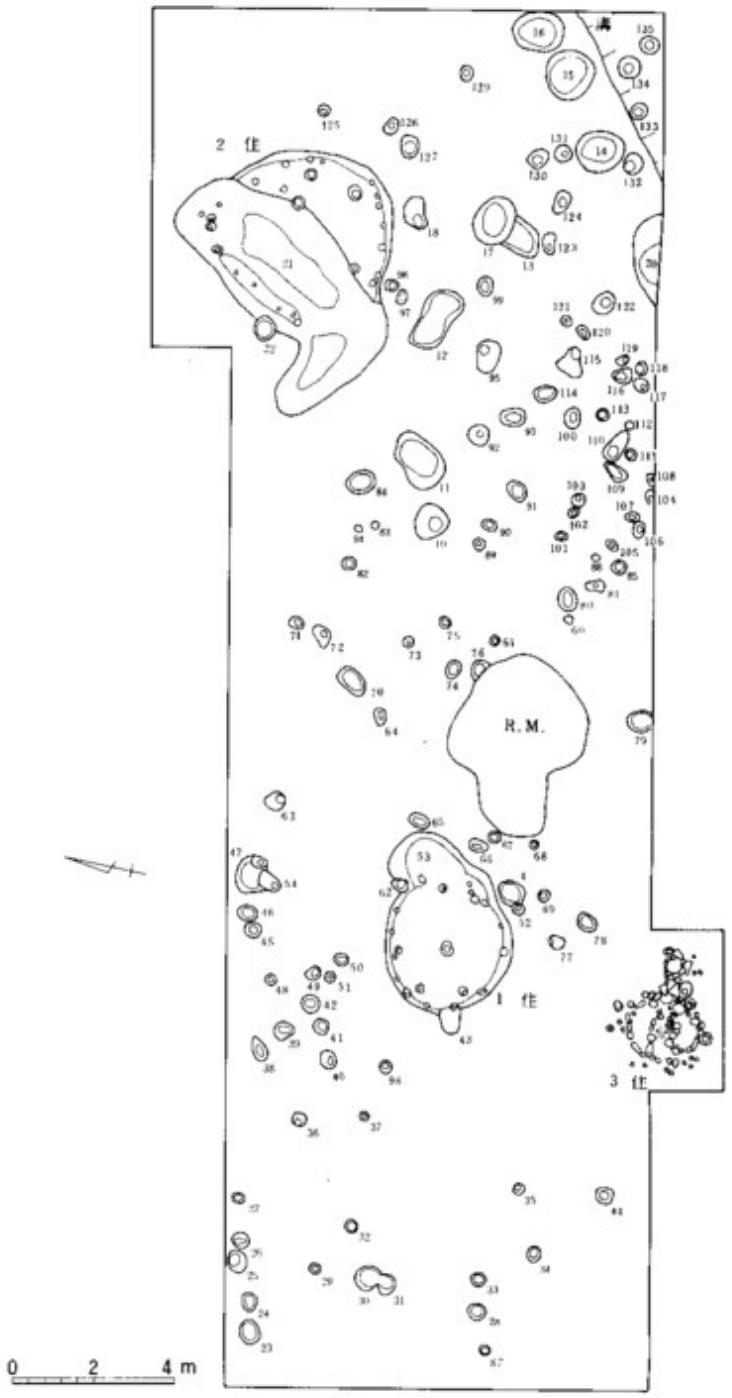
第3章　調査結果

第1節　発掘地の概要

茸原遺跡は過去に幾多の発掘調査がなされている。昭和39年3月10日より15日まで実施された、松商学園高校の手による、第1回目の発掘調査をはじめとして、昭和54年3月9日から20日にわたる調査まで、前後12回におよんでいる。その後昭和55年にいたり、遺跡地開発のための、道路整備事業が行われることになり、それに伴う持前の緊急発掘調査が、はからずも2月24日より3月4日まで実施される。今回はそれ以後久しく年を経て行われたもので、前記の諸調査からはずれた地域が調査対象となった。いわゆる該所に建造物設置計画があり、持前の発掘調査となったものである。

現場は往古に刻まれた梓川右岸系第2河岸段丘線が、発掘地の北側を西南方向より東北方向に通じており、その南側段丘線上の縁辺に立地している。

発掘はさしせまった工事の都合もあり、建造物設置箇所域を対象区域として限定し、メッシュ方式を採用することとして、現場に東西35.6m、南北10.4mの長方形区画をとり、不要な耕



第2図　茸原遺跡遺構全体図

土の削去を持前に行う。発掘面積は370m²強である。その後、メッシュ区画のための基準点の木杭打と、３m正方形の区画割が全面になされる。区画割の東西線は基準線となるＮＳＯを中心として、南側にＳ３の線、北側にＮ３よりＮ６までの線を等間隔に張り、南北線はＥＷＯを基準線として、東側にＥ３よりＥ12までの線、西側へはＷ３よりW18までの線をそれぞれ等間隔におとし、遺構、遺物の所属検出に便ならしめる。

表土削除後下層への掘り下げをすすめると、遺構、遺物の検出面は黄褐色土となる。いわゆる地山ともいえるが、発掘地のほぼ中央南北線のＥＷＯ線を境にして、西側は平坦に近く、東側は北を高所として南に低くなる勾配を若干附していた。

主なる遺構としては、発掘地の中央南北線やや西寄りに、第１号竪穴住居址が検出され、その南約3.5mに未掘部分におよぶ敷石の住宅址を拡張区設定して明確に発掘する。また人工ではない自然形成と判断されたロームマウンドが、第１号住居址の東側に近く発見される。中央より東側には第２号竪穴住居が北側に発見され、、巨大ピットと複合し、南東部には巨大ピット群のSK14・15・16・20および自然流路の検出がそれぞれあった。その他、大別新旧の様相を呈する柱穴状ピット群が散在したが、整然さを欠き建物址やまとまりのある遺構等に、直接結びつくものはみられなかった(第２図参照)。遺物は縄文中期、後期土器片、打製石斧、凹石、石棒等の石器類が得られた。

発掘時の層序は、北壁断面セクションによる以外に、適当な場所がなかった。その北壁も東北部に発見された第２号住居址が北側の未掘部分にかかり、その全容を知るために拡張されたため、計測不能となり、メッシュの南北線基準のＥＷＯ線より西側の計測のみとなる。それによるとW11より西側の区域は、多少の波はあるものの検出面まで安定した１層０～32cmと、２～４層６～43cmから成り、Ｗ８よりＥＷＯの東側の区域にかけては、同じく１層13～36cm、２～４層５～30cmからなるものの、東側へ寄るに従って、１層から４層へのくい込みが激しく波をうち、畑地での根菜類の栽培による痕跡を思わせた。W11よりＷ８の区域は、前記の区域にあまりみられなかった１層と４層との間に、２層と３層がブロック状に複雑に入り込み、しかも顕著となり耕作で攪乱された跡が想像された。１層は黒色耕土で遺物を包含しており、２層は黄褐色粒子がブロック状に混入する黒褐色土で遺物は含まず、３層は黒褐色土で遺物を僅かに含む。４層は暗褐色土で遺物を僅かに含み、５層は黄褐色土となり遺構の検出面となる。（大久保知巳）

第２節　遺構と遺物

１．住居址

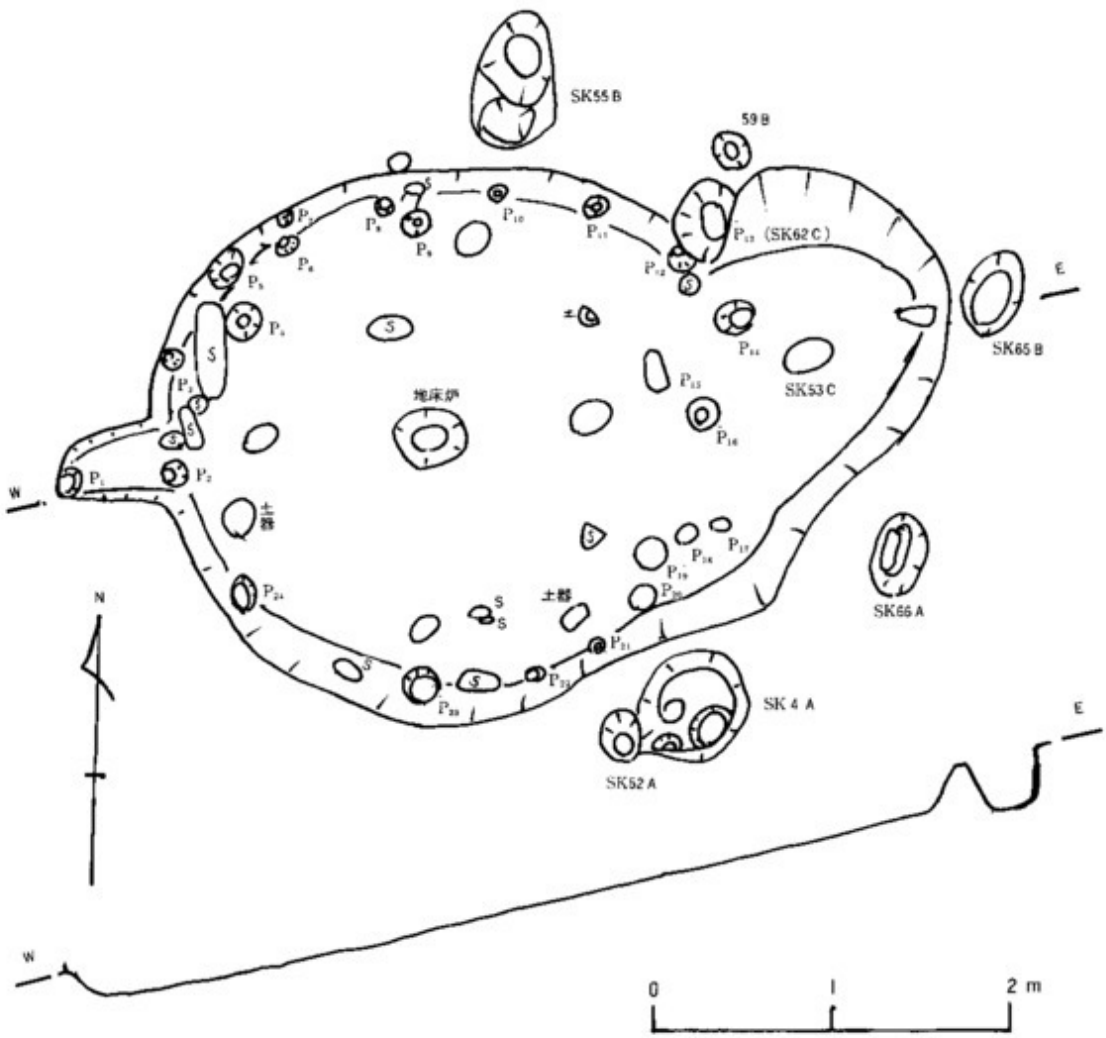
(1)　第１号柄鏡型竪穴住居址（第３図）

第１号柄鏡型竪穴住居址は、発掘地の中央やや西寄りに発見される。敷石を全く伴なわず、址の周辺には小ピットが不規則に散在し、遺構の南東部にロームマウンドが、また南部には約３mの距離をおいて、小型の柄鏡敷石遺構がほぼ同一面上に検出される。無敷石の柄鏡型住居址の規模は比較的小形で、やや東西に長い楕円形プランを示し、東西の上面径約3.7m、下面径約3.3mとなり、

南北の上面径は約3.1m、下面径は約2.8mであった。西側に若干の張出し部があり、その規模は東西方向に約60cm、南北幅約50cmで、深さは約23cmとなり、底面は主体部の床面と同一レベルを示していた。これが柄鏡型の柄部に相当する部分である。この張出部の北側に接して、石棒状の自然石、54×17×13cmが1個、横たわって発見されたのは注意される。

また本址の東側には、土坑53Cが切り合うかたちで複合状態にあり、このため本址の東壁が明瞭に把握するにはいたらなかった。また本址床面と土坑の床面も同一レベルにあり、両者の前後関係を知る資料も得られなかった。

本址の東西セクション北壁の所見では、覆土は1層、2層が自然の埋没土を示すものであり、住居址の東側半分の部域に、人工によると思われる3層、4層が認められた。第1層はローム粒や炭化物粉末を含む、暗黄褐色土約28cmであり、本址中央部分が最も厚い堆積を示す。第2層はローム粒、炭化物粉末を同様に含む、暗褐色土10～20cmで、住居址の壁周にそって厚く、中央部辺にいた



第3図　第1号柄型竪穴住居址

るに従って薄くたち消える。この両層および床面に、別項遺物の項で詳述の土器片等遺物が包含されていたが、その量は比較的少なかった。また床面上あるいは壁周などに散在する石礫をみとめたが、それらは13×28～5×10cm程のもの11個位を認める。特別の意味は感じられなかった。第3層は黄褐色のローム粒土が、厚さ約13cm。長さ約100cmにわたり、ブロック状に入り込んでおり、第4層は撹乱層で、厚さ15～20cm、長さ30～50cm位のものが、上層部の2箇所に認められた。これは本住居址と土坑53Cとの切合いから生じたものと理解された。

検出面よりの壁高は、南壁が約22、西壁約22、北壁約15、東壁は約20各cmで、比較的浅い感じを受ける。床面は凹凸なく平坦で滑らかさを感じさせる。しかしやや堅緻さにかけるきらいがあった。床面のほぼ中央部に地床炉をおくが、その規模は東西約43、南北約33、深さ約23各cm程の摺鉢状を呈する。炉内には木炭粉末と焼土が堆積していた。

また壁周に沿い小さな柱穴が囲繞する。この壁周を柱穴がとりまくのが、柄鏡型住居址の共通的な特色とも言える。本址の場合、都合24箇所に認める。このうちP_1は柄部の端部にあり、P_2は柄部と体部の連接部にあるが、これらいずれのピット内にも、埋甕等の遺物は認められなかった。柱穴の規模は、P_1が15cm円形、－22cm（以下規模の数値はいずれもcm）。P_2は15円形、－22。P_3は10円形、－22。P_4は約20円形、－50。P_5は25×15、－18。P_6は10円形、－13。P_7は10円形、－10。P_8は10円形、－12。P_9は15円形、－20。P_{10}は10円形、－12。P_{11}は12円形、－11。P_{12}は15×10、－24。P_{13}は上面径30×50、下面径15×22、－17（土坑62C）。P_{14}は20×18、－14。P_{15}は10×25、－約26。P_{16}は17×20、－34。P_{17}は6×10、－7。P_{18}は13円形、－5。P_{19}は20円形、－14。P_{20}は15円形、－30。P_{21}は10×12、－15。P_{22}は10円形、－15。P_{23}は20円形、－22。P_{24}は13×23各cmであった。（－記号は深さを表示）。これらの柱穴は、いずれも柱の根方の傾斜度から、上端の方向が住居址の中央上部に向けて差込まれていることが知れたが、上屋が主柱穴4本で仕組まれた一般的な在り方と異なり、中央部で集約する、円錐形をなしていたものと推考される。また柱の配列と所在箇所から、出入口は南西部にとられたものと考えられる。

床面あるいはその直上の出土遺物等から、本址は縄文中期終末に位置づけられると思われる。

土　器

第1号住居址、各種土坑、ロームマウンド、自然流路内出土遺物は、多量の土器片と若干の石器等として得ることができた。土器は完形を示すものなくいずれも破片で、各遺構別に活用できるものを選別し、可能な限り採用する。それらの資料は拓本図3枚に収録したが、内、第4図は資料1～40までが第1号住居址の床面、あるいは床面直上の覆土内出土土器であり、第16図は資料41～82までで、SK5・7・14・15・16・20・22およびロームマウンドの1部資料をまとめる。第17図は資料83～135で、ロームマウンドと自然流路内の土器片を収録した。

土器片の活用資料には1連番号を附し、整理、記述に便ならしめる。このため各遺構や遺構内伴出遺物を優先的に取扱い、床面直上や覆土内の遺物は、たとえ年代的に先行するものであっても、後述するが如き取扱いをした。

第１号住居址出土土器（第４図１～40）

第１号住居址内出土土器のうち、活用できた資料は第４図１～40までである。この内１～10までは床面上出土土器であり、11～40までは床面直上あるいは覆土内より検出された土器片である。総じていえることは、器厚が0.7～0.8cmを示すものが圧倒的に多く、他に１cm程の厚手を示すもの、0.5cm位の薄手を示すものがある。色調は黄褐色系が多く、暗褐色、黒褐色をとるものがあり、胎土に砂粒を多く含む２～５・10・20などがある。

１は平縁口縁部破片で壁調整はよく、口縁下に横走する隆線１条を施し、その上下部に円形の刺突文を連続させている。隆線下部は沈線に区画された、縄文帯を施している。２・３・４は共に胴部破片で、器全面に縄文を施した地に、曲直の平行する沈線をとる。以上縄文中期後半中葉に位置されるものであろう。５は内壁研磨の頸部破片で、横走する隆帯上に斜めの刻目を附し、その下部に櫛目状の波状文が僅かにみえる中期末の土器である。６・７・８は消磨縄文のみられる後期初頭土器片である。６・８は内壁調整がよく、８は平縁口縁を示す。９・10は共に網代底の底部である。９は底部径8.5cmで直に立ち上がった後、外反し、10は底径10cmで器はゆるやかに外反する。共に壁面は無文である。

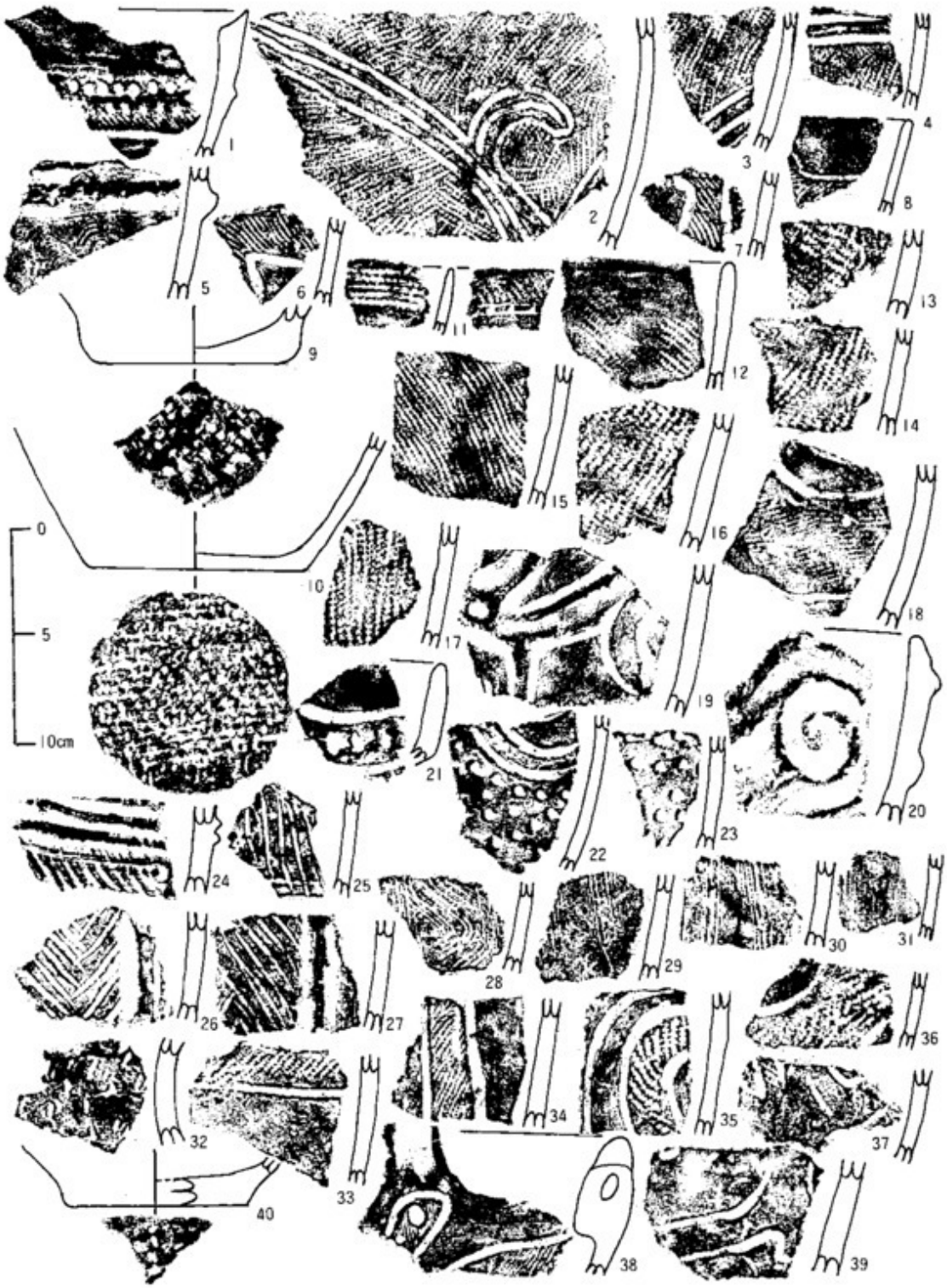
11は平縁の口縁部破片で、器厚0.7cm黄褐色をとる。内壁に４条の平行する押引状文を施し、外壁に横位の整った縄文帯をめぐらし、その下部に区画どりの押引文を１条めぐらしている。前期末相当土器であろうか。12～17は器全面に整った縄文の施される類である。12の平縁口縁を除き他は胴部破片で、器厚は中位である。中期中葉末相当であろう。18は沈線を伴う凸帯区画による縄文の施された土器であり、19は幅広の凹凸帯の組合わせにより器壁に抽象構図を描く類で、共に表裏研磨されており、19には朱塗の痕跡がある。いずれも中位の器厚、黄褐色で中期前半に含まれるものである。

20は波状口縁部で砂粒を含み、隆起線による渦巻文を残している。21～23は刺突と沈線併用の施文を残し、色調は黒褐色をとる。21は平縁の口縁、他は胴破片である。24～31は沈線文の施された胴部片である。20～31は中期後半土器であるが、26～31は32を含め同末期に相当するものである。32は刺突文の施された頸部片である。

33～38は、磨消縄文手法のみられる１群の土器である。器厚は0.7cm前後、色調は黄褐色ないし黒褐色をとる。この内33～36は胴片、37は底部に近く、38は波状口縁の頂部を突起させている。いずれも壁調整のよく仕上げられた、縄文後期初頭に位置づけられる土器片である。39は胴部片で器厚は１cm、焼成のよい明るい土器で、無文地の器面に曲直の複雑な沈線をのこす、同じく後期初頭に位置される土器片である。40は底部破片で網代文を残す。底径は8.4cmで、やや立ちあがった後外反して開口する。内外共壁調整はよくない。（大久保知巳）

(2)　第２号竪穴住居址（第５図）

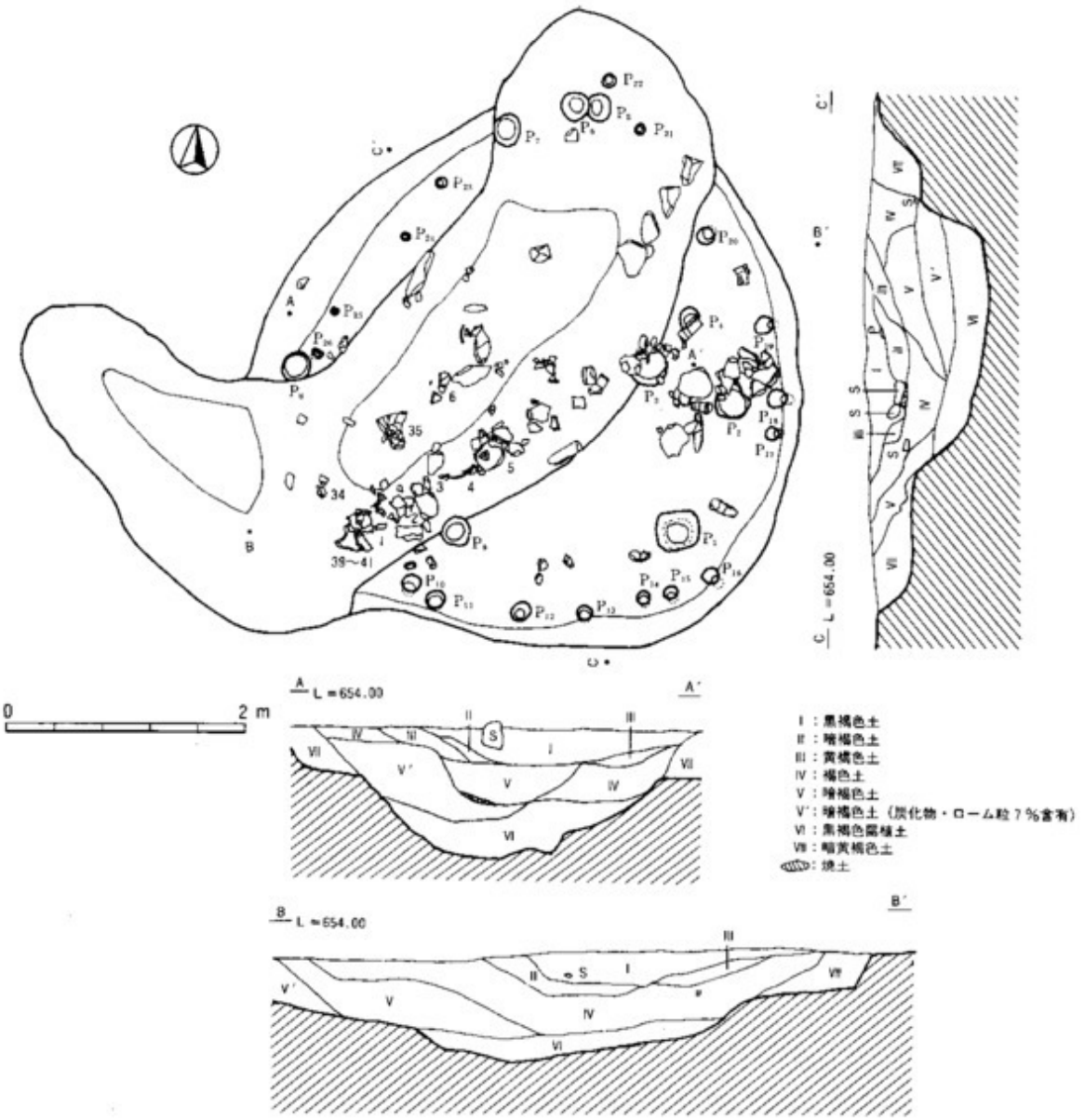
調査区の北東隅部に位置して、プランは420～430cm径のほぼ円形プランを呈する。埋土は暗褐色で縁辺部では分層出来なかったが、東側の遺存部を除いて大方の部分を第21号大土坑に切られる為、



第4図　第1号住居址出土土器

埋土の堆積状態は不明。床は明確で、貼ってはいないものの堅固であり、掘り形はなかった。ピット（柱穴）は26基検出され、位置・深さからP_1（−40cm）、P_2（−43cm）、P_9（−35cm）は主柱穴であろう。21基は大小差異はあるが壁柱穴で、その半分以上が住居の内側に向かって斜堀されていた。炉址の存在は、第21号土坑に切られて不明である。尚その他の床下検出遺構及び住居内施設は検出されなかった。床面遺物は住居の東端に集中する。この内（第6図）1は取上げNo.14、2は取上げNo.15を図化した。

出土遺物は縄文中期中葉勝坂II式（中部高地編年藤内II式）を中心にその前後に比定される土器



第5図　第21土坑と第2号住居址

片の出土があった。石器は打製石斧２点、他に黒燿石・チャートの剥片が多数出土している。

第２号住居址の平面図については、第21号土坑との関連により15頁（第５図）同時図化されているので、参照願いたい。

第２号住居址の時期は、床面出土の（第６図１・２）を当て縄文中期中葉藤内II式期とする。

第２号竪穴住居址出土土器（第６図）

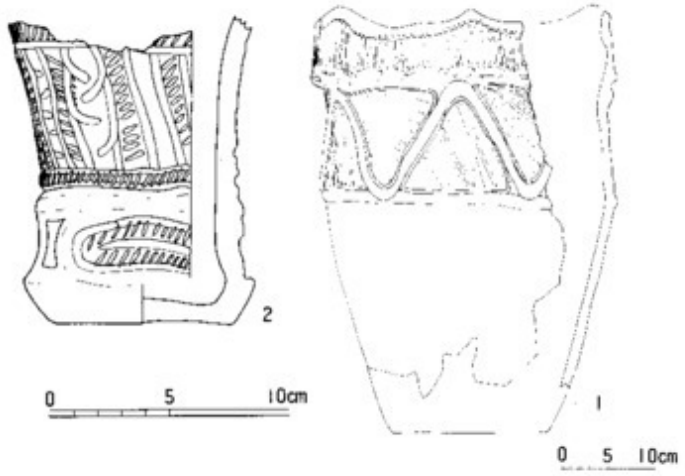
１は、横帯文土器で、口縁が直線状に開く深鉢である。６単位の波状口縁と頸部を巡る細い眼（まなこ）状の連続横隆帯の合間は、縦の沈線で隈なく充塡し、更に胴下部の無文帯を区画する胴最大径部にめぐる横隆帯とを、連結する６単位のＶ字状の山形隆帯が施文され、その空間には棒状工具による太めの沈線が、斜め・縦・三叉文等と順序良く施文された極めて企画性の強い文様構成で、文様を胴上部に集中させている。底部は欠損しているが推定される器高は44.3cm、口径31.7cm、厚さ１cmを計測した。色調は胴上部は暗褐色を呈し、他は黄褐色で焼成は良好である。

２は、小型円筒形土器で胴上部以上を欠く、内反したスリムな胴部にソロバン玉状の屈折底土器である。胴部近くに楕円区画が施され、胴部には余す処なく、竹管による斜めの上下刺突と棒状工具による交互刺突を自在に施文、更に縦沈線でこまかに無文部と施文部を画し、最後にやや幅広の無文帯を交互刺突状の沈線で埋め、残存胴上端近く横沈線が巡る横帯文土器で、残存器高12.7cm、厚さ0.9cmを計測した。色調は赤褐色で焼成は極めて良好で、内外面共に磨きが丁寧で、胎土に雲母を含む。１・２何れも縄文中期中葉勝坂II式（藤内II式）に比定される土器である。

（三村肇・澤谷昌英・塩原久和）

(3) 第21号土坑（第５図）

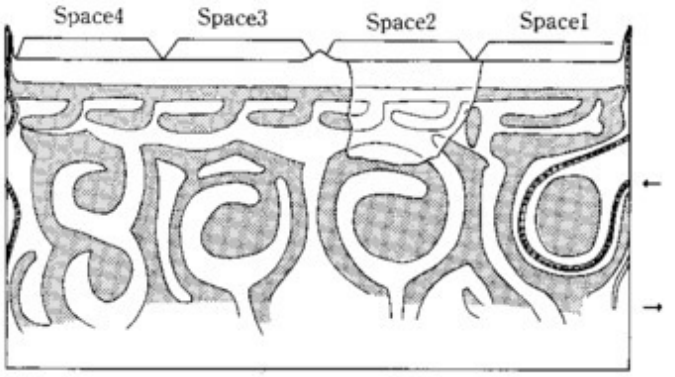
第21号土坑は、調査区の東北隅部で発見された。過去12次に渉って松本市松商学園高等学校地歴部が発掘調査を行った地点に隣接し、縄文中期中葉藤内II式期の第２号竪穴住居址を中央部西寄りに南北に切る大土坑で、プランは北西側に内湾した部分がある不整形であり、大雑把には北東～南西方向の楕円形状の、南西端から一段高くなった突出部が北西側に伸びた形状である。規模は長軸方向で最大600cm、短軸方向では最大270cm、最深部は検出面より108cmを計る（突出部を除く）。下端（したば）は図化したものの、明瞭な訳ではなく、断面形は舟底状を呈し、立ち上がりは緩やかに開く。長軸方向はＮ－38°－Ｅを指す。覆土は黄褐色～暗褐色を主体とするが、最上層部と最下層部には黒褐色土が在る。出土している土器は、縄文中期末～後期初頭段階に比定されるものであった。土坑底部



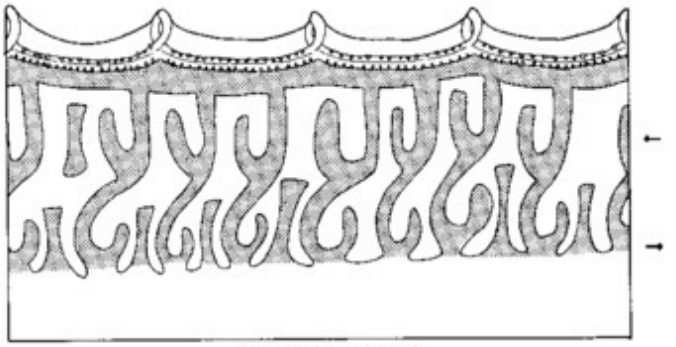
第６図　第２号竪穴住居址出土土器

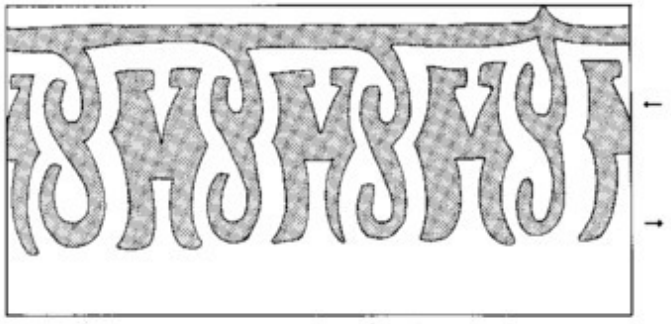
面からは土器の出土は僅少で、大半は標高652.9～653.5m付近のII・III層上部～IV・V層下部付近に認められ、意図的な秩序は認められなかった。拳大～人頭大の角礫は標高653.4～653.5m付近に集中し、この土坑の埋没過程で投棄されたと考えられ、一括土器群より後の所産であろう。尚突出部の遺物は皆無であった。

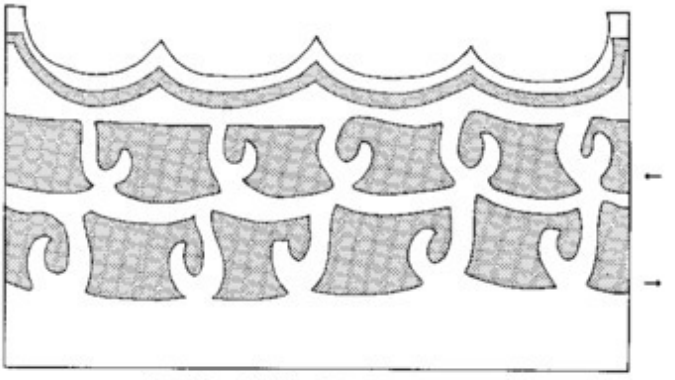
この土坑は、非常に難しい意味を秘めた遺構と考えられ、中部高地でも極めて珍しい関東編年縄文後期初頭称名寺I式(中頃から後半)、中部高地編年大安寺式併行の復元完形土器7点、頭部より上を欠くもの1点と計8個体の一括土器群が、横倒し状に押し潰された状態などで纏まって出土した。一部焼土の出土はみたものの、I層下部のものは中世以降のものと考えられ、当該土器との関連は明確ではない。一括土器群には立位や方向性の整然も明瞭には把握出来なかったが、突出部を除く土坑主体部分の南東隅付近に集中して出土した。このうち図化した一括土器群は、(第9図) 1は取り上げNo.1とNo.2、(第8図) 2はNo.5、(第10図) 3はNo.39とNo.40とNo.41、(第10



展開模式図 (No.1)


展開模式図 (No.2)


展開模式図 (No.3)


第7図　展開模式図 (No.4)

図）4はNo.35、（第11図）5はNo.6、（第11図）7はNo.3とNo.4、（第11図）8は土器集中区である。何れにしろこの様な第21号土坑の形態、完形土器セットの出土からして、やはり特別な遺構であることを窺い知ることが出来る。骨片の出土は見なかったが、墓址の可能性もある。然し脂肪酸等の土壌分析など最後の詰めをしていない為、不完全の謗りは免れないが、この土壌では骨片の残存及び脂肪酸等の分析は財政の問題を含めて不可能と判断した。飛躍した推論であるが第3号敷石住居址との関連など、感謝と畏敬の念をこめてセット土器を厚く葬ったという土器埋葬施設の可能性も考えられる。南東部に纏まって出土した事が一つの提起をしているのではないかと推論出来る。然し覆土は人為的埋没というより全般に自然な堆積状況であった。兎に角安易な結論は控え、今後の同類遺構の発掘調査にその性格を委ねたい。

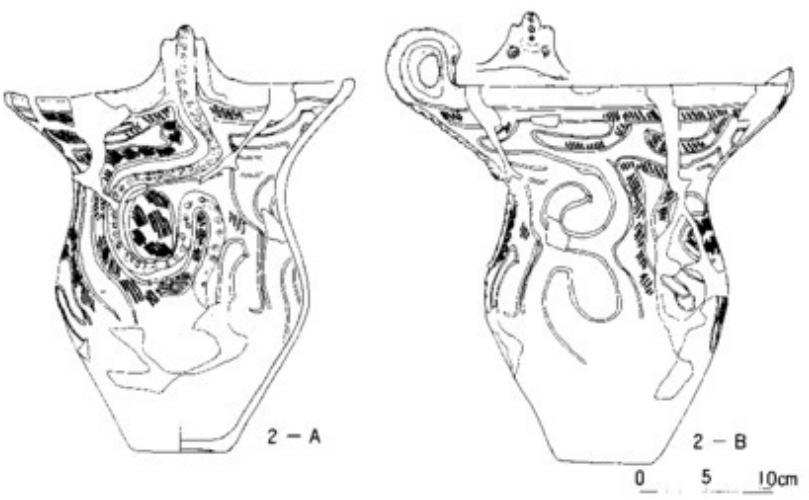
出土遺物は上述の縄文後期初頭称名寺Ⅰ式期の一括土器群の外、土器片として縄文中期後葉加曽利EⅣ式、曽利Ⅴ式、後期初頭称名寺Ⅰ・Ⅱ式、後期前葉堀の内Ⅰ式が出土している。

（三村肇・澤谷昌英・塩原久和）

21号土坑出土遺物（第8～11図）

いずれも埋土のⅣないしⅤ層中から、大部分は押し潰された状態で出土している。Ⅲ層下面には焼土が残りⅣ層とは不整合をなすため、8個体の土器については一括性が極めて高い。

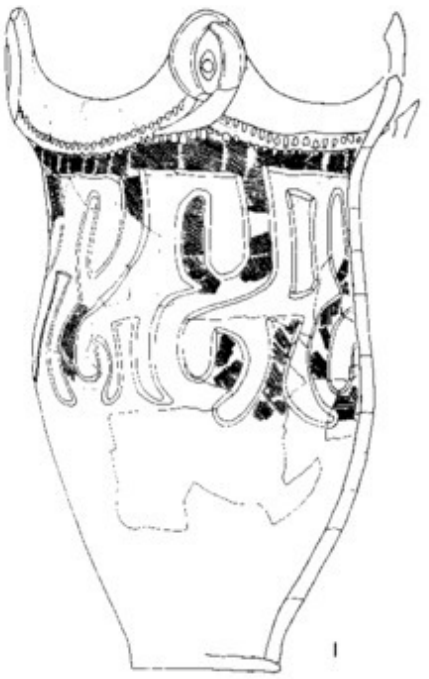
2は粘土帯7段積みにより成形された深鉢で、器高28.0cm、口径27.4cmを測る。器厚は約5㎜と非常に薄手な作りである。胴上部は強くくびれ直線的に口縁へ向かって開く形態をなす。口縁部は環状突起を一か所もち、これに対向する箇所は小波状を呈する。また、底裏は上げ底風に仕上げられている。紋様は、器面をナデ調整したのち、口縁直下に環状突起から派生する沈線を一巡させ、これに依存して口辺部に横J字状のモチーフが7単位繰り返される。以下は、胴下部の最大径付近まで棒状懸垂紋で縦方向に4分割された器面へ渦巻紋ないしJ字状紋が展開する。モチーフの内外にはRL縄紋が充塡されているが、無紋部の磨きは顕著でない。第7図（No.1）Space 1は環状突起から蛇行垂下する刺突をもった隆帯が入り込み、ほんらいの渦巻紋を完全に崩している。Space 2および3は大柄な渦巻紋がネガティブに表現され、Space 4はJ字紋が上下2段に連結している。いずれの場合も紋様の下端は開放し、横位に連結されてはいない焼成は



第8図　21号土坑出土土器（一括土器群）

良好で、胴最大径からくびれにかけて内外面とも暗褐色化しているほか、全体に淡褐色を呈している。

1は4単位波状の深鉢である。現存高45.3cm、口径およそ28.0cmを測り、口径の割に器高が高く全体的に不安定な印象を受ける。胴上部のくびれは緩やかで、口縁はほぼ直線的に立ち上り、内面が「く」の字状に張り出す。波頂部は欠損するものの、中央に円孔をもつ対弧状貼付紋が配されるものと思われ、これから左右に伸びる隆帯が口縁直下に続いている。隆帯下は胴中位の最大径付近まで2段J字紋が棒状工具によって沈線で描かれるが波頂部を基準にした厳密な割り付けはみられず、所々に棒状のモチーフを挿入しながら横位8単位に連結している。モチーフ内にはLR縄紋が縦に施されたあと、沈線が再びナゾられている。一連の施紋の最後は隆帯の上下に刺突列が配される。底裏には経緯とも1本越え2本潜りの網代痕を留めている。焼成は良好で、胴最大径付近が暗褐色化しているほかは黄褐色を呈す。



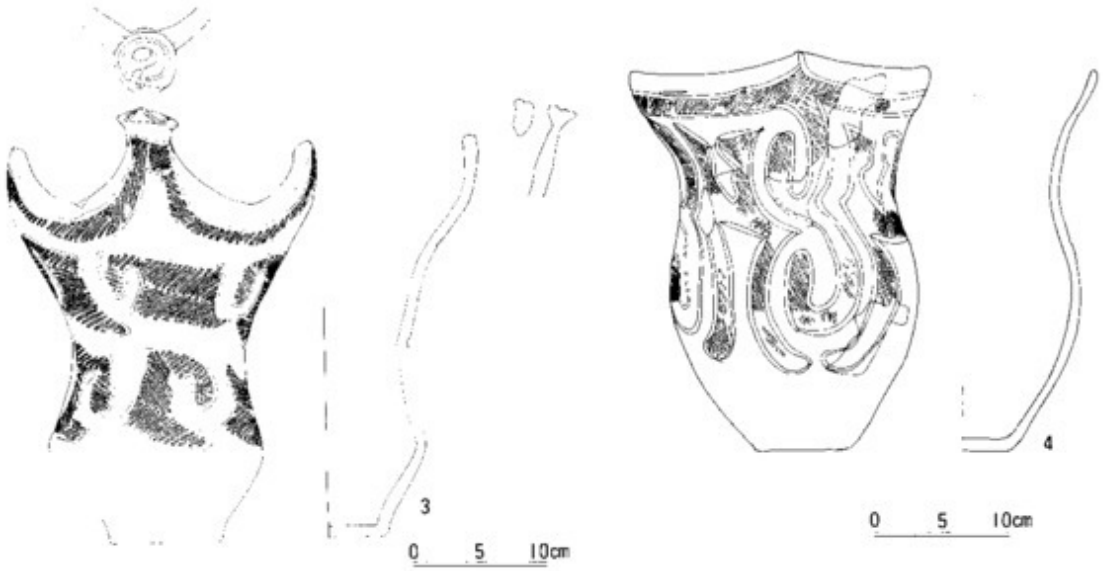
第9図　21号土坑出土土器（一括土器群）

6は胴中部に最大径をもち口縁にむかって直線的に閉じる壷で、黄高16.8cm、口径6.3cm、胴最大径14.0cmを測る。2個1対で横位の橋状把手を有する。口辺部を1巡する沈線下に、橋状把手間を除いて、LR縄紋を縦転がししただけの単純な紋様をもつ。底裏はナデ調整を受けているものの、網代痕がわずかにみられる。焼成は良好で、胴下部は黒褐色ないし黄褐色、上部は赤褐色を呈する。器面に黒色砂粒がやや目立つ。

5は、約1/2を欠損しているものの、器高14.2cm、口径およそ27.2cmを測る浅鉢で、底部から直線的に開き口辺部に至って内折している。器外面はヘラ状の工具によりケズられ口縁端部から内面にかけては丁寧に磨かれている。内折した口辺部に横位のRL縄紋を施紋し、所々2本1組の沈線を垂下している。焼成は極めて良好、胎土も精選された感じを受ける。

7は平縁の深鉢で、底部を欠損しているが推定される器高は37.4cm、口径31.6cmを測る胴上部で緩やかにくびれ、口縁にむかって直線的に開く。端部は面取りをして平滑に仕上げられ、内面に粘土がはみ出している。口縁直下は縄紋帯を設け、胴部に大柄なJ字紋を6単位単純に展開して、モチーフ外をLR縄紋で充填している。J字紋の下端は、胴下部の最大径付近で2本の沈線が横位に連結する。焼成は普通で、一部器面に摩滅がある。色調は底部付近が黄褐色、その他は全体的に灰褐色を呈する。成形の際の輪積み痕が明瞭に観察できる。

4は、胴上部でくびれたのち開きながら口辺部に至って内曲する深鉢で、口縁に1か所小突起をもつ。器高は28.5cm、口径は22.6cmを測る。口縁直下を巡る沈線は、この小突起のところで口縁へ



第10図　21号土坑出土土器（一括土器群）

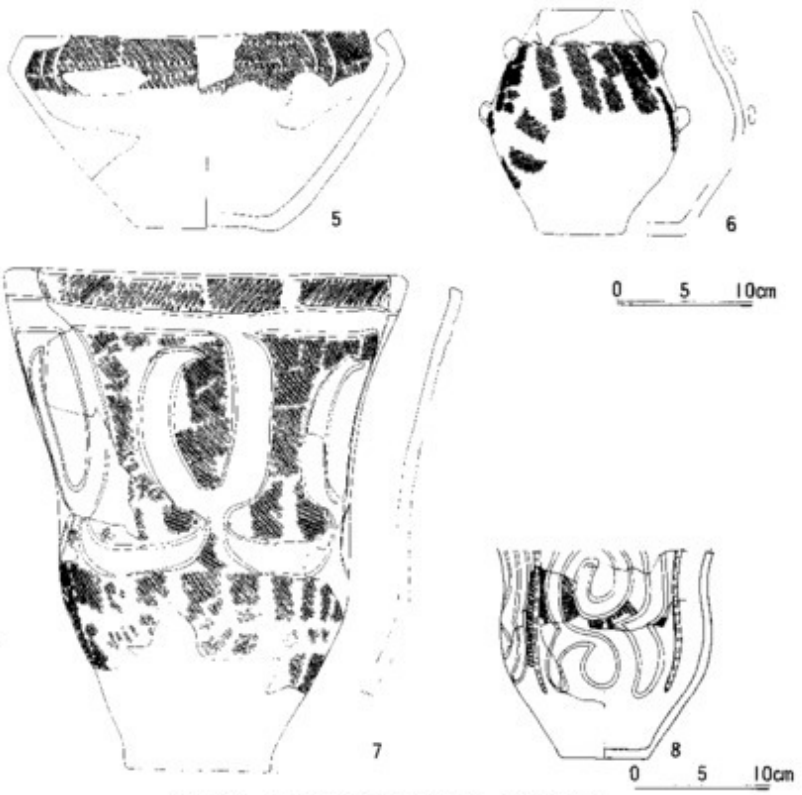
抜けている。胴部には、上下２段Ｊ字紋を４単位配し、モチーフ内にLR縄紋を充塡している。Ｊ字紋を取り巻く沈線は横位に連結され、あいだにスペード紋を描いている。底裏には僅かながら網代痕を留めている。焼成は良好で、口縁から胴中部まで暗褐色、胴下部は赤褐色を呈する。特に、口辺部および胴最大径付近には僅かながらタール状のススが付着している。

３は４単位波状口縁の深鉢で、うち１か所に筒状突起をもつ。波頂部までの高さ29.8cm波底部までの高さ25.5cm、口径は22.4cmである。突起の上面には、小瘤を起点に円孔を取り巻く沈線が描かれている。口縁直下には口縁の形態に依存した帯状紋が巡り、胴部のくびれより上には逆Ｊ字紋が、くびれ下の胴部最大径までＪ字紋が上下２段に施されている。２段Ｊ字紋の配置は口縁の形態と対応せず、横位に５単位巡る。モチーフ外にLR縄紋が充塡され、モチーフ内は丁寧に研磨されている。内面調整は良好、焼成も極めて良い。口辺部及び胴下部は暗褐色、胴上部および底部付近は褐色ないし赤褐色を呈する。

８は口縁から胴上部を欠損するが、胴中部でくびれをもつ深鉢である。現存高15.5cm、胴部最大径15.4cmを測る。刺突をもつ垂下隆帯で器面を４分割したうえで、胴部くびれ付近までＪ字をネガティブに表現し、このＪ字を左右から取り巻く縄紋帯が下段でＪ字紋を構成して入る。焼成は普通。内面は丁寧に調整されている。胴部のくびれから最大径にかけて黒褐色を呈すほかは全体に黄褐色を呈す。

さて、長野県における縄紋後期初頭の土器としては大安寺遺跡出土土器が良く知られ、称名寺Ⅰ式の後半段階に位置付けられている。本址出土資料はこれに先行し、おおむね称名寺Ⅰ式の中段階に落ち着くものと思われる。５は胎土・形態・紋様など異質な部分は多いが、とりあえず一括性の高さを考慮してこの段階に置いた。また、８はこれらより若干新しい要素が看取される。

8個体の土器群中、深鉢にはいずれも2次焼成の痕跡がうかがえる。おそらく日常生活に用いられたものと思われるが、土坑内から一括出土した状況から想像をたくましくすると、縄紋後期における葦原人にとって、流行の先端を行く斬新な作りをしたこれらの土器を無為に投棄するにはしのびなく、あえて近親者を埋葬するかのごとき意識のもとに葬ったものではないかと思われてならない。ちなみに、称名寺Ⅰ式前半段階に位置づく一括資料としては、平出遺跡J5住出土土器群および瑠璃寺前遺跡3住出土土器群を挙げるに留まる。



第11図　21号土坑出土土器（一括土器群）

いずれにせよ、県下では完形8個体にのぼる称名寺Ⅰ式中段階に位置づく良好な一括資料はこれが初見であり、今後は本資料を基軸に長野県の縄紋後期初頭の編年が再構成されることは間違いない。そうした意味でも、この土器群は優れて価値の高いものといえよう。

最後に、本稿の記述を快諾していただいた三村肇氏に厚く御礼を申し上げると共に、指導助言をいただいた石井寛氏、校閲を賜った綿田弘実氏にもあわせて感謝申し上げたい。　（平林　彰）

第21号土坑出土の縄文後期初頭土器群についての考察

この度葦原遺跡の発掘調査で、第21号土坑から縄文後期初頭、称名寺式土器8点が一括セット土器群として発見された。この時期の中部高地に於ける土器群の様相については、近年とみに資料が増加してきているが、未だに不明確な点が多く、セット土器群の出土が待たれていた。意味軸も当概時期の研究者でもある平林彰氏は以前から松本平西部地区に注目していた。「……いま現在目をつけている所が浅間山の裾野ですね。それから千曲川の上流域です。この辺は埼玉県と山を隔てて交流がある地域です。もう一方は松本の西側から木曽谷、伊那谷の沿線、こういった所に出て来る可能性を残していると……」と称名寺式土器に関する交流会の関東・中部の討論のなかで述べている。この様な状況のもとでの今回の出土は、他方面に渉って重要な問題点を提起する貴重な発見であった。縄文中期後半から後期への転換を、土器文化からその流れを追って見ると、中期後半の唐草紋

系の土器が徐々に簡略化され、次第に形態が崩壊して行く。こうした中で関東地方の加曽利E系の土器の搬入が多く見られる様になり、唐草紋系との融合が行われた。松本平の中でもこうした傾向は西側の朝日村、山形村、梓川村そして当波田町などの遺跡に顕著である。中期最終末の段階ではこうした唐草紋系の土器群の系譜を引くその終焉に位置付けられる土器群に、後期初頭の関東地方の称名寺式土器への系譜上の土器が搬入され、中部高地でも加曽利EIVの新しい要素を持った土器が、曽利Vと伴出する様になる。

後期初頭になると唐草紋系の流れを汲む土器は姿を消し、これに変わって称名寺式系の土器群が主体と成って来る。これがこの時期の大まかな流れであるが、詳細については解明が進んでいないのが現状である。

尚第21号土坑出土の称名寺式一括土器様式については、平林彰氏に原稿を依頼した処、心良く快諾され玉稿を戴いたので、その項をご参照願いたい。

加曽利E式・唐草紋系の系譜に位置づけられるものの融合・同化を含め、通常の関東の称名寺I式期（中程～後半）の搬入品と在地性土器との同時出土は、この時代の土器群の存在した時間幅等、更には他の土器の混在等のない純粋なセットとして、その価値は極めて高いものである。

従来の研究では東日本に於ける称名寺式の土器群は、その存在する時間が極めて短いものであったとされていたが、この資料はそれを裏づけるものかも知れないし、延いては急激に遺跡数が多くなる当該時期中津式土器文化圏（瀬戸内海地域を中心とした西日本）の在り方にも一つの答えを出したものと思われる。尚、称名寺I式土器片10点余内1点は平縁の深鉢と思える口縁部分の土器片で、口縁直下3.3cmの無文帯を隔てて、内径1cm幅の太い平行沈線が横に引かれ、内側中央部分には棒状工具による刺突が約2cmの間隔幅で1列に施文された所謂刺突帯が形成される称名寺II式相当の土器で、器厚8.5cmを計測した。

また縄文後期初頭称名寺期に関わる長野県（中部高地）と新潟県（越後平野・信濃川流域）の一部を含めて、『信越地方の主な称名寺式土器及び伴出（一括）土器分布図』（第20図）を作成した。中部高地に於ける称名寺式土器の様相については、出土資料が乏しい為、その実態については未だに不明な点が多い。幸いこのたびの葦原遺跡の発掘調査により、第21号土坑から一括土器群として、ほぼ完形の称名寺I式期（中程か後半）の土器が纏まって出土した。通常称名寺式土器は土坑から単独で発見される事が多いが、今回は驚くことに明らかに称名寺I式期に相当する土器6点と、やや異質な精製浅鉢（第11図）と2個1対の横位の橋状把手を持つ壺形土器で、東北の袖珍土器に類似（第11図）を伴出、計8点の一括土器群の出土を見た。信越地方では初見のこの貴重な資料をもとに分布図を作成し、信越地方主に長野県においての称名寺式土器の在り方について些かでも迫れればと称名寺I式～II式（下部が乱れ、単に系譜を引くだけのもの、或いは次期堀の内I式の範疇に？をも含めて）の完形土器及び図上復元、並びに器形・文様の鮮明なるものを落葉広葉樹林帯文化圏：所謂東北（網取I式）、越後（三十稲場式）、北陸の日本海側土器文化圏と相互に影響を及ぼし合うと考えられる信濃川水系・姫川水系、照葉樹林帯文化圏：東海及び西日本（中津式）の太平

洋側土器文化圏への伝播と受容が想定される天竜川水系・木曽川水系と各河川別に追跡調査を計り、併せて関東からの土器文化の浸透を正面に受けるオブスィディアン・ロードの佐久、八ヶ岳山麓地域なども網羅して掲載した。当該土器研究の一助になれば幸いである。今回小破片の為収録出来なかった姫川・木曽川水系も含めて、最近道路建設等に関わる大規模な発掘調査によって、長野県内でも今までその数が少ないと言われてきた縄文後期の遺跡が次々と発見されているので、近い将来良好な資料の出土を見て、明確なる当該土器の様相が解明されるものと思われる。

新潟県内（越後）に於いて、信濃川水系から発見された称名寺式土器（No.1、No.2）は、かつて縄文中期に地域文化として隆盛をきわめた火炎土器（馬高式）文化圏に次ぐ完成された後期初頭三十稲場式土器文化圏より、三十稲場式に伴われて尚かつ一括土器群として出土したものである。土器様式に関わる時間差と伝播並びに受容・非受容を知る上で重要な資料として掲載し、冒頭に信越とした訳である。

この項の考察にあたり、御教示、御協力を戴きました平林彰氏、綿田弘実氏、新谷和孝氏および別掲分布図作成にあたり、新潟市の小池邦明氏、県内の大竹幸恵氏、倉沢正章氏他関係者の皆様に大変お世話になりました。ここに紙上をおかりし厚く御礼申し上げます。

（三村肇・澤谷昌英・塩原久和）

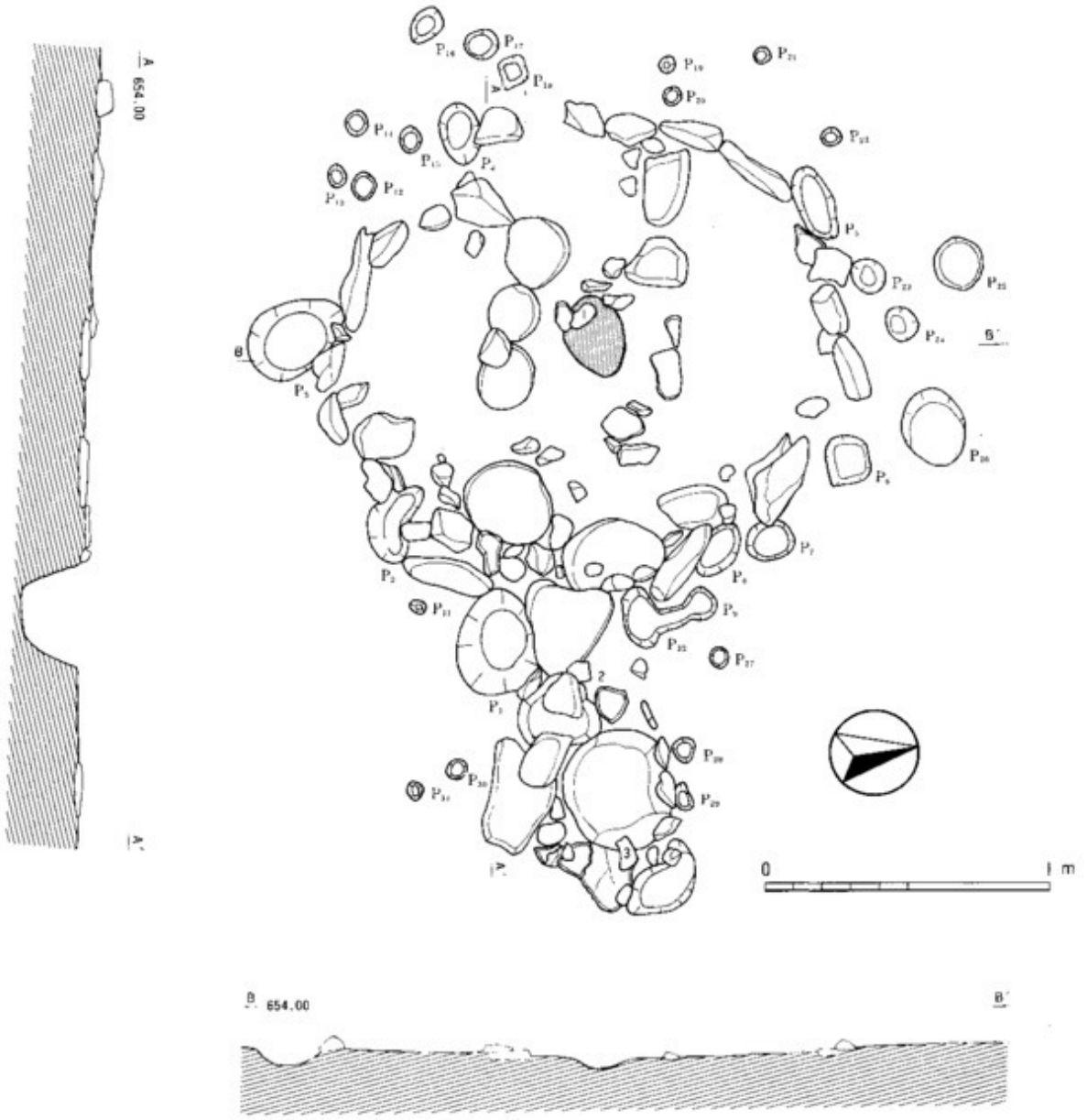
(4) 第3号敷石住居址（第12図）

第3号敷石住居址は第1号住居址の南側、発掘調査区の壁際に長さ130cmの円形周礫の一部として、偏平な河原石を長めに立てて並べた何らかの遺構として発見されたものの、調査区域外の為、最小限の拡張工事によって発掘調査されたものである。長軸272cm、主体部174cm、張り出し部（柄部）と主体部との接続幅32cm、張り出し部（柄部）先端隅部の幅72cmの柄鏡形プラン、主体部はほぼ正円形で、周縁部に帯状の環状配石が僅かの乱れは認められるけれども整然と並べられていた。主体部中央部には30×20cmの小型の地床炉が設置されていて、薄い焼土が堆積していた。その炉を囲むように主体部入口部から奥壁に向かって、2列の円形平石がやや列を乱しながらも並べられ、恰も部屋の区画を想定し得るかのように、左右に分割させた空間を構築させていた。2分割された空間部（居間？）は敷石住居構築時に既に企画、実施されていた。全面敷か部分敷かは敷石の下部施設精査の時点でも注意したが抜き取りの痕跡は認められず、やはり当初より意図された部分敷であったに相違ない。主体部と、張り出し部（柄部）との接続部は一辺が約30cmの三角形状の平石を配し、明確な区画と強固なる敷設をはかり、左右にはやや八の字に開くピット（柱穴）－19cm、－40cmが付設されていた。張り出し部(柄部)は全面に敷石を敷設し、先端隅部には40×40×10cm、38×20×7cmを計る2個の平石を敷設し、隙間及び外縁は小礫を立て並びに埋め込み、敷設の強化がなされ、更に右側には30×20cm、－15cmのピットが付設されていた。尚主体部の敷石と張り出し部(柄部）の敷石とのレベル差は無かった。第3号敷石住居址には掘り込みが無く、平地式で環状配石の外縁に沿ってピット（柱穴）群が巡り、張り出し部（柄部）の外側にもピット（柱穴）が発見されているので、上屋があったものと考えられる。屋内施設としての埋甕、及びこの時期に多く発見され

る石棒の出土も見なかった。※環状配石の北外側周辺覆土から下部を欠く石棒が発見されているが、第3号敷石住居址との関連は不明である。

敷石取りはずし後、更に深く削り込みを計ったが、遺物・遺構の出土は見なかった。

出土遺物は、覆土上層部から獣骨と考えられる骨片が出土しているが、3号敷石住居址に直接関わるものかどうかについては不明である。出土土器は、炉内及び敷石上面に張りついた状態で発見された縄文後期初頭土器片3点のみであった。

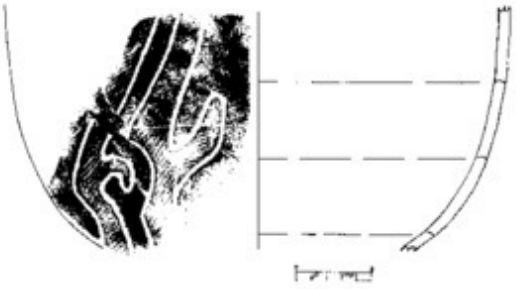


第12図　第3号敷式石住居址

この３号敷石住居址の時期決定は、柄鏡形敷石住居の形態と整理の段階で接合した３点の単独出土の浅鉢の胴部破片、縄文後期初頭称名寺Ⅰ式の後半、中部高地編年大安寺式並行期を以て、後期初頭称名寺Ⅰ式期後半とする。

第３号敷石住居址出土土器（第13図）

第３号敷石住居址より検出された遺物は、僅か３点の土器片のみで、張り出し部（柄部）部分の敷石上面に、それぞれ煤で固く張りついた様な状態で２点、主体部中央地床炉内より１点と、３箇所に何れも主軸線上に分散して発見されたが（第12図１～３）、遺物整理の段階で３点は浅鉢胴部土器破片として接合した。（第13図）は、並行する太



第13図　第３号敷石住居址出土土器

めの沈線で所謂Ｊ字文、渦巻状文を磨消縄文で、ポジ・ネガ対等に描く縄文後期初頭称名寺Ⅰ式後半に比定される土器と思われる。Ｊ字文・渦巻状文が、大幅に複雑化若しくは簡略化されている為、明確なる紋様構成の把握が出来ず、採拓をし観察したところ中部高地の大安寺様式に類似するものと考えられ、称名寺Ⅰ式の最も新しい時期に位置づけられるものである事が判明した。付着した煤状タールが厚く表面を覆っていた為、検出された時点では無文土器として取り上げた。色調は暗褐色で、胎土に長石を含み焼成は良好で、内面の磨きも丁寧に施されていた。大きさ等復元を試みた処、上部残存胴部端部径33cm、胴下部端部径19.5cm、高さ16cmの推定数値を得た。第３号敷石住居址時期決定の浅鉢型土器である。

第３号敷石住居址について（第12図）

今回の発掘調査で検出された第３号敷石住居址は、松本平の縄文後期初頭の敷石住居址としては最も遺存状態が良く、この時期の様相を知る上では貴重な資料と言えよう。当葦原遺跡では、過去にもこの時期と考えられる敷石住居址が４軒（内１軒は今回調査記録の追跡が出来なかった）が検出されている。然しながら破壊と攪乱等の為に遺存状態は良いとは言えないものであった。松本平でも同時期の敷石住居址の発掘例が年々増加はしているが、やはり後世の破壊等で良好な資料の出土をみていない。然し今回発掘調査された第３号敷石住居址は単独での検出であり、調査区外への拡張によってプランの全容を検出したと言う経過もあって、第３号敷石住居址に関わる周辺遺構の全面確認が出来なかった以外は、住居址本体の遺存状態は極めて良いものであり、ほぼ完全なる姿での遺存と考えて間違いない。

敷石住居の出現については、縄文中期後葉の住居址に見られる入口部の張り出しと、日本海文化圏の複式炉との相関による炉辺の敷石が結びついて発達し、柄鏡形の敷石住居址が成立したのだという考え方が若干私案が混じったけれども通説となっている。中部高地においても塩尻市柿沢遺跡[注①]の事例などに見られるように、住居址内の炉から奥壁付近に敷石を持つものが出現し、それが次第に発展して行く事が知られている。即ち炉の周辺の敷石が今回の葦原遺跡第３号敷石住居址の例に

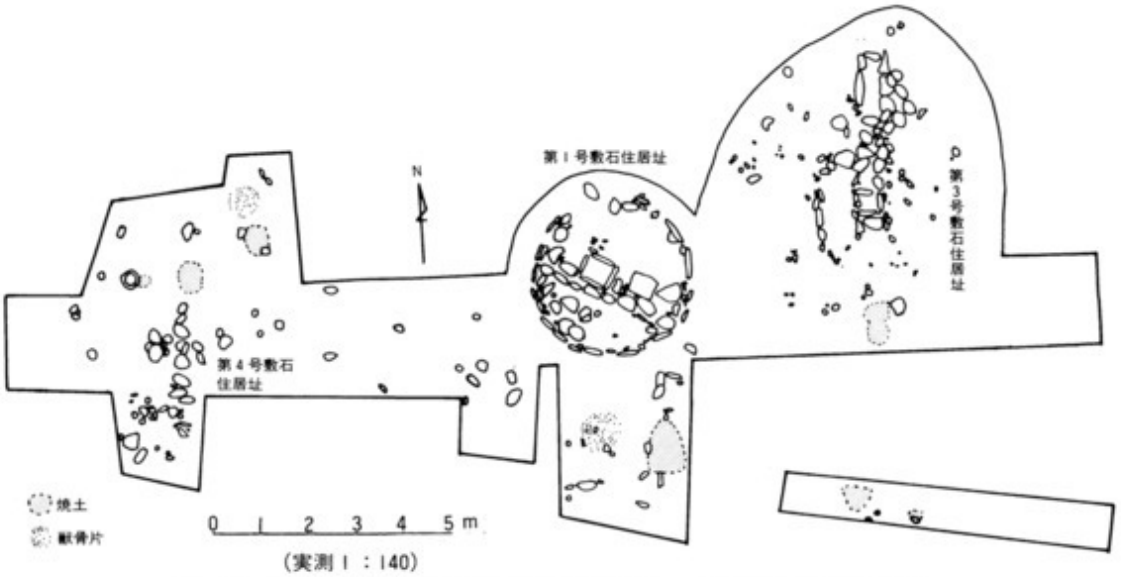
見られる様に、住居の入口から炉、そして奥壁を繋ぐ主軸線上に見られ、更に同じ時期の竪穴住居址に見られる入口部の突出と結びついて、柄鏡形の敷石住居へと発達していったようである。

当葦原遺跡からは過去1964～1980年にかけて13回の発掘調査によって、竪穴住居址(縄文中期〔藤内Ⅰ～曽利Ⅴ〕) 24軒、敷石住居址 (加曽利EⅣ～堀の内〔後期前葉〕) 4軒、縄文後期平地住居址1軒と計29軒を数える縄文期の住居址が発見されている。出土した遺物は厖大であるが、何といっても縄文中期土器が中心で、主体は中期後半の唐草紋を含む曽利式及び伴出する加曽利E式で、他に藤内Ⅰ・Ⅱ式、井戸尻式が見られる。後期土器は初頭から前半の所謂称名寺Ⅰ式～堀の内Ⅱ式迄の出土があり、当葦原遺跡では、敷石住居の出現から頂点に達した時期には集落が営まれていたわけである。一つの遺跡で計5軒の敷石住居址が纏まって発見されたという事は、松本平では珍しく従来から言われている敷石住居の属性と在り方、更に時間差などが解明出来ればと、今回の第3号敷石住居址と1964～1965年に第1次、2次と2回の発掘調査で発見された第①号敷石住居址、第③号敷石住居址、第④号敷石住居址とを改めて対比検証し、葦原遺跡における集落の在り方、更には今回の発掘調査で出土した第21号土坑での縄文後期初頭称名寺式一括土器群が持つ意味、並びに第3号敷石住居址の構築と在り方について資料の掲揚を計ることとした。(○付数字は旧番号)

過去第1次、第2次に発掘調査がなされた第①号敷石住居址は、縄文後期 (敷石直上より初頭称名寺式〔大安寺式〕、前葉堀の内式が出土) 径340cmの円形プランで外縁は偏平な河原石を規則的に立て並べにして環状配石を巡らし、中央敷石部やや西寄りに厚さ20cmに及ぶ焼土を充満した石囲い炉を設置、更に南側に石棒の欠損品が検出されたが、将来の再調査を期してそれ以上の精査は中止され、保存、埋め戻されている。南側の西半分に偏平石が疎らに敷設され、東側石棒周辺には敷石は皆無であった。尚、炉縁石に沿ってやや直線状に長めの石を連ねて、東南外縁と西北外縁とを結び、発掘担当者が注目した環状配石が一部2列に敷設された部分を切っている。北側は敷石の敷設は無く空間部となっていた。第③号敷石住居址は、縄文中期末葉 (埋甕加曽利EⅣ式、更に埋甕の内部には無紋小型土器が入れてあった)推定長軸約500cm、推定主体部約300cm、推定張り出し部(柄部)長さ約200cmの柄鏡形プランと考えられる。主体部中央部に石囲い炉があり、炉の西側に1m離れて円形に伸びると思われる環状配石が遺存されていたので、主体部の正円形が想定可能となった訳ではあるが、環状配石の敷設技法は第①号敷石住居址の環状配石に相違して、立て並べ敷設ではなかった。主体部と張り出し部 (柄部) との接続部から炉址に向かって2列の所謂主軸線上に敷石が遺存し、西側は炉址と外縁環状配石の間には敷石の敷設はなく、環状配石の外側約1m離れた位置で石棒の欠損品が発見されている。この敷石住居址も保存措置を講じた為、敷石下部の施設は不明である。第①号、第③号敷石住居址共にピットの付設が無かったと報告されているが、この地域は春一番の黄砂塵が舞う北端である事に留意し、結論はやはり再調査によるほかはないと考えられる。第④号敷石住居址は大幅に破壊されていて、プラン想定は不可能の状態で発見された。然し検出された敷石中心部の、口縁部を西へむけて横倒しになって発見された埋甕とその西側の敷石が階段状に下がり、20cmの高低差を持って2個の大きな河原石の下で発見された2個めの埋甕、発掘担

当者はこの２個の埋甕に時間差を認めているので、なんとも言えないが、或いは入口部から主体部への複数の埋甕を持つ敷石住居址の可能性も考えられる。[註②] 以上葦原遺跡第１次、第２次に於いての第①号、第③号、第④号敷石住居址の発掘調査概報の要約である。今回発掘調査した第12図の第３号敷石住居址と過去に発掘調査がされた第14図第①号、第③号、第④号敷石住居址とを対比すると幾つかの共通点が見られる。①外縁に環状配石が巡っている。②張り出し部（柄部）から炉、更には奥壁へと主軸線上に敷石が敷設されている。③主体部が関東系の円形である。④炉を挟んだ２列の主軸線の敷石敷設工法は、直線的敷設工法で明らかに空間部を意識して構築している。⑤全面敷ではない。※今回の発掘調査では敷石住居址の全貌を検出後もピット（柱穴）を発見できず、更に周縁部を削りこんでようやくピットの検出を見た。

柄鏡形の敷石住居址について、本橋恵美子氏は『縄文時代における柄鏡形住居址の研究～その発生と伝播をめぐって～』のなかで、柄鏡形住居址を敷石の状態や敷石・配石の有無によって４つに分類している。A類：ほぼ全面に敷石が拡がっているもの、竪穴住居でない場合は、柄部を含めた床面全体に敷石がみられる一方、竪穴住居址である場合は、奥壁や柄部に敷石が置かれないものもある。B類：敷石が部分的に見られるもので、住居址内空間のうち、出入口部、或いは炉辺部から柄部にかけての空間部分というように、特定の箇所に敷石がみられるもの。C類：柱穴に沿って帯状に小礫が巡るものであり、礫は床面より浮いた状態で検出されるものが多い。これを敢えて「環状小礫配石」と呼称し、「周礫遺構」（金井1984）と区別し、柄鏡形住居址固有のものに限定する。D類：敷石配石を持たない竪穴の柄鏡形住居址。[註③] 更に山本暉久氏は『敷石住居出現のもつ意味』のなかで、葦原第①号敷石住居址を第２期（確立期）敷石住居址、「意図的な敷石」炉辺部敷石タイプ（奥壁部、炉辺部、出入り口部が有機的なつながりをもって、敷石の拡大があったと考えられる。[註④]



第14図　長野県東筑摩郡波田村葦原遺跡第１次・２次調査概報より転載

として把握している。即ち第①号敷石住居址の中央主軸線上に、奥壁・炉辺・出入り口部と直線的な敷石が、敷設されているからである。第③号敷石住居址も破壊を受けているものの、プランを復元したならばやはり「意図的な敷石」、張り出し部（柄部）～炉～奥壁と直線的な敷石が敷設されていたものと考えられる。

今回の第３号敷石住居址からは、内部施設としての埋甕、石棒は発見出来なかったが、張り出し部（柄部）と主体部との接合部分で、左右対象で検出されたピット（柱穴）及び張り出し部（柄部）先端隅部右側のピット、更には上屋を想定させる周縁部のピット（柱穴）群が発見された。これらの施設はいずれも前掲のＢ類、炉辺部敷石タイプに見られる共通点であり、構築工法も形態も第①号、第③号敷石住居址と共通した点も多く、ほぼ完全な形態での遺存として考えて良いと思われる。さて敷石住居といえば必ず論議を呼ぶのは一般住居か祭祀的住居かと言う事であるが、この住居址からは祭祀的な遺物は発見出来なかった。然し敷石文化圏内でも数少ない程の小型敷石住居址であった。最近の数多い敷石住居址の発見により、一般住居として捉える考え方が多くなってきている。葦原遺跡に於ける敷石住居の在り方については（第④号敷石住居址は除く）縄文中期末葉（加曽利ＥⅣ式）、後期初頭（称名寺Ⅰ新式）、後期前葉（堀の内Ⅰ式）の３時期に亘って建築様式を伝承し、現時点で見る限り全面敷石の受容がなかったと考えられる。縄文中期後半からの気温の寒冷化進行に即応するかのように出現し、縄文後期中葉迄の極めて短時間の利用のみで、忽然とその姿を消し去った敷石住居には如何なる時代的な背景が作用したのだろうか？全面敷石の効果を考えた場合、雨水の侵入阻止と排水更には土中からの上昇湿気の遮断と輻射熱による乾燥効果と食料貯蔵など一般住居として優れた居住性を発揮する。しかるに中途半端とも思える部分的な敷石敷設住居に固執し続けた理由は葦原縄文人の頑なな精神文化が窺われる。採集食料の増減により祈りの様相は豊饒に感謝した中期中葉勝坂期から一転して、冷害による採集食料の不足と食物連鎖による狩猟動物の減少の不安に恐れ戦き、必死なる祈りを捧げた中期後半曽利期には、個々の集落に於いてもテリトリーの拡大と、移動よる住居の離散・移住が多発し、遺跡数増大の原因となったと考えられるが、土器一形式に於いても存続年数に長短があったと想定すれば、そうとばかりは言い切れない。

この様な不安定な環境の中にあって、葦原縄文人はより一層祈りへの意識を高め、保守的とも言える当該敷石住居を伝承した。複数の埋甕は第④号敷石住居址から、石棒については、第①号敷石住居址より、又第③号、第３号敷石住居址からも環状配石の外側から発見されている。葦原遺跡の敷石住居址はこの様に屋内的な祭祀的面をもち、今回の第３号敷石住居址のように余りにも矮小で１坪にも満たない広さでは、一般住居としてはやや狭すぎ、気温と植生の変化に対処する縄文中期末～後期前葉に渡る変革期に、一貫した祈りへの祭祀的様相を強く持ち合わせた住居とも考えられる。そこで改めて発掘時の所見をもとに、今一度第３号敷石住居址の性格を洗い出して見ることにした。①堀り込みがなく、環状配石の外側に沿ってピット（柱穴）がめぐり、張り出し部（柄部）の外側にもピットが発見された。②主体部中央部には極めて使用頻度の低い薄い地床炉が在る。③断面観察の結果、無敷石部分には敷石抜去痕が認められない。④敷石部分の下部からはピットその

他の施設が検出されなかった。以上を総合すると次なる4点が引き出されてくる。(1)上屋が構築されていた。(2)遺物の出土量の僅少さを加味し、炉の在り方は日常一般の家屋として長期に亘り生活が営まれたとは考えられない。(3)敷石は全面敷では無く、当初より部分敷であった。(4)敷石行為が為される前段階では住居として機能していない(住居廃絶後の特殊配石遺構ではない)。即ち、当敷石住居は処女地にこそ造られなければならない属性をもっていたのである。結論として葦原遺跡に於ける第3号敷石住居址は、やはり一般住居として限定するには無理があると考えられる。幸いにも保存処置がなされた第①号、第③号敷石住居址、及び第④号敷石住居址の再調査によって明確なる葦原遺跡に於ける当該敷石住居址の在り方が、解明される事を願って、現時点での検証の小稿を終わる。尚最後に資料その他御教示を頂いた小林康男氏・新谷和孝氏の名前を記して厚く感謝いたします。

(三村肇・澤谷昌英・塩原久和)

敷石住居址発掘調査最終段階の詰めについて

敷石住居址の発掘調査において最も重要且つ肝要な問題点は、上屋構造の特殊性並びにその有無の問題、竪穴住居からの変遷・受容の問題、一般住居か祭祀遺構かどうか、更に一歩進めて夏季用など2季的住居と云う問題、敷石が敷かれている部位や空間の分割の問題等が挙げられる。従来の研究では敷石住居址の平面形態にばかり捉われ過ぎて、重要な視座を持ち得なかったのではないかと指摘出来る調査報告も少なからず見受けられる。発掘調査担当者の意識・姿勢の問題として、平面形態のみならず敷石の下に隠された情報がないか、或いは断面観察によって何か判る事はないかといった調査時に払われる注意と努力こそが、上述の諸問題の論議を深めるであろう。

その意識・姿勢が顕著に示された具体例として長野県更埴市屋代遺跡(1993年発掘調査)に注目して見る事とした。屋代遺跡では縄文中期後半加曽利EIII～EIV期の敷石住居址の炉の形態に従来の定説を覆すような発見がされた。

堆積された焼土は石囲い炉の内側ではなく、外側に拡がりが見られた事から、調査担当者は平面的精査のみならず炉址を床面もろともたち割って、断面観察を行なっている。その結果炉石埋設以前に既に堀込み炉(地床炉)が存在した事が、数軒の住居址で明らかになった。つまり地床炉→石囲い炉、竪穴住居→敷石住居の造り替えが成された可能性があるという。而も驚くべき事に、地床炉には厚い焼土の堆積や炉壁の被熱がある為に、著しい使用頻度が窺い知れるが、造り替えられた石囲い炉では焼土の堆積が全く無いか、あっても地床炉とは比較にならない程少なく、使用の様子を明確には把握出来ないものであった。而も1例のみではなく数例の出土を見た訳で有るから決定的な事象と云えよう。この事実は炉の機能の仕方の変化、敷石住居の受容のされ方、敷石行為の祭祀性、住居廃絶等に関する重大なヒントを示唆しているものと思われる。(註)⑤

今まで一般的に石囲い炉が顕現しても『炉＝火を焚いた跡』程度の認識で、炉を漠然として捉え、炉の機能の仕方迄の熟慮が及ばない事が多かった。屋代遺跡の石囲い炉の様に焼土の堆積の全くなかった例として、葦原遺跡の第3号敷石住居址、使用頻度の少ないと考えられる例として、大村塚田遺跡11号方形敷石住居址(曽利V)(註)⑥ほうろく屋敷遺跡敷石1号住居址(曽利V)(註)⑦梨久保遺跡40号

柄鏡形敷石住居址（後期中葉）[註⑧]等があり、県外では神奈川県下北原遺跡例[註⑨]、群馬県田篠中原遺跡例[註⑩]の様に石囲い炉中から全く焼土が検出されなかったというものもある。

調査時に於ける担当者の意識・姿勢についてであるが、この様に炉ひとつとっても調査段階の所見は重要である。土器文様を再度検証したい時は収蔵庫に何度でも通えば良いが、調査終了から年月を経た遺構の検証には反復性がない点が泣き所である。

上述の石囲い炉を考察する際、各遺跡の報告を検索しようとすると、炉に関する所見は余りにも少なく断面図も不十分なものが多い。敷石上面と炉石の上端のみ（下端を省略）と、炉の内部をエレベーション図にしたものはよく見かけるが、炉石の据り形はどうなっているか、焼土・炭化物の堆積はどうなっているか、焼土は炉の内部のみならず外部まで拡がっているか、石囲いの炉の前段階に地床炉が存在したかどうか等を明確に示している図は少ない。

葦原遺跡に於いても第①号、第③号敷石住居址はプランの全容＝平面形態を捉えたのみに過ぎず、やはり将来の再調査を期待したい。尚今回の新３号敷石住居址についても現時点での認識からすれば、十分な観察が出来得たかどうか反省される。

以上調査最終段階として、炉址は地床炉・石囲い炉に関わらず床面諸共截ち割らなければならない。ピット（柱穴）にしても今回の第３号敷石住居址の様に、周縁部に巡るのかそれとも敷石の隙間に在る（ピットを意識して敷石に隙間を設けている）のか、敷石を剝ぎ取って見たらピット（柱穴）が出てきたのか、或いは全くピットが検出されなかったのか、この事は上屋構造を考える上で重要である。県埋文センターのご好意による屋代遺跡の炉址に関わる貴重な資料の認識により、葦原遺跡の敷石住居址群の様相解明は、将来の再調査に待つ外はない。

取り上げた４つの敷石住居址を検証すると、第④号敷石住居址の入口部（柄部）を埋甕の位置から推定して東側とし、第３号敷石住居址は同方向となり、第①号敷石住居址はやや南に振る。第③号敷石住居址のみ北側を入口部（柄部）として大幅な差異が認められる。尚、年代差が認められたと報告されている２個の埋甕などを含めて、敷石住居址の集落性・祭祀の伝承性などの解明に役立つものと考えられる。

（三村肇・澤谷昌英・塩原久和）

２．土坑・ピット（第15図）

調査によって検出された各種土坑・ピット類は、大小合せて122基であった。その大部分は１号、３号住居址と、２号住居址の間にはさまれた内側の空間に集中し、北西から南東に向かってベルト状の分布を示す。その多くは柱穴状の小ピットで100をこし主体となるが、その配列等に意図的な整然さがうかがわれず、建物址等に結びつくものは認められなかった。また中型以上の土坑は都合19基を数えるが、検出面下では浅い皿状や舟底状の不明瞭なつくりが多かった。それらは別表に示す如くであるが、なかでも特徴的な14・15・16・20の大型土坑について、下記に詳述しておきたい。21号は２号住居址と複雑な複合状態にあり、両者のからみの中での記述にまかせたい。

大型土坑

発掘地の東南部の隅を斜めによぎるかたちで、大きな筒形のピット群が発見される。それらは確認された範囲では3～4箇所で、なお未掘部分にわたると考えられるが、西より東へSK14・SK15・SK16・SK20と命名され、直列状に並び両方共未掘地にかかって、全体像を明らかにすることはできなかった。多分にある部分的な一部を感じさせるものであった。以下それぞれについて記す。

SK14　本遺構はSK15・16の南西側直列上に所在する。全体の形状は円筒状で、規模は上面径東西約90×南北約100cmの楕円形、深さ約100cmであり、下面径は東西約65×南北約86cmの楕円形を示す。覆土は4層からなり、第1層は暗褐色土約24cmで小石の混合が認められ、第2層は黒味のある暗褐色土約24cmの堆積を示す。第3層は暗褐色土に、黄土がブロック状に混入しており、その堆積は約12cmとなり、第4層は暗褐色土約40cmとなっている。上層部にこぶし大の石2個を認める。ピット底部面上15cmより下降の周壁面には、自然堆積による石礫の混入がみられた。

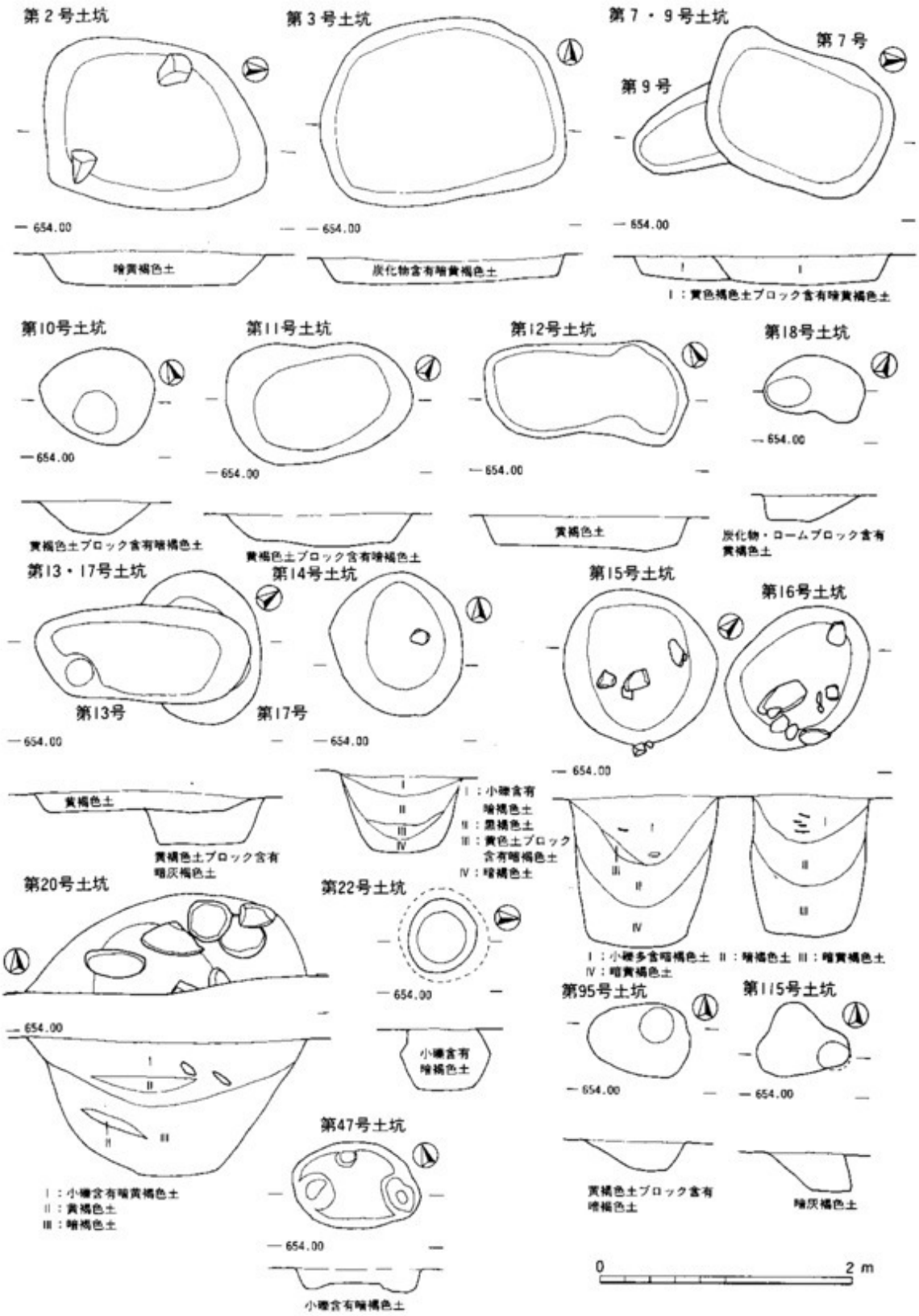
SK15　前記SK14の東北に隣接し、約90cmの間隔をおいている。全体の形状は円筒状となり、その規模は、上面径が約110cm円形、下面径は約80×100cmの楕円形で、深さは約120cmを記す。覆土は4層よりなり、第1層は暗褐色土約53cmで、小礫、土器片など混在し、上部縁辺より注口土器の注口部片など出土する。第2層は遺物を含まぬ暗褐色土約23cm。第3層は第1層と2層との間に、レンズ状に堆積する黄味がかった暗褐色土が約10cm介在する。以下第4層が、暗い黄褐色土約44cmとなって堆積する。この土坑も後述のSK16同様、遺構中央辺の覆土上層部に、こぶし大から人頭大の石数個が集まっていた。またピットの底部面上15cmより下層の周壁には、黄褐土中に自然堆積の石礫の混入が認められた。

SK16　発掘地の東壁に接しており、SK15の東北に隣接する。その規模は、上面径南北約110cm、東西約120cmのやはり円筒状を示し、深さは約110cmを記す。その下面径は85cm円形をなす。覆土は3層よりなり、第1層暗褐色土約40cmは、石礫や土器片の混在がみとめられ、第2層は、遺物や石礫を含まない暗褐色土約33cm。第3層は暗い黄褐色土約37cmである。第1層の覆土上層部には、こぶし大の礫から最大約20×40×45cmの大石まで、人頭大の石を主に9個程が遺構の東側にかたまって発見されており、底部面上約45cmより下層は、ピットの周壁面に自然堆積による石礫のくい込みがみられた。

SK20　本遺構はSK16・15・14の延長線上にあり、SK14の西南部に近接し発見される。遺構は北端部の1部輪郭をみせるにとどまり、その大部分は南部の未掘部分にかかるとみられ、その全容を明らかになし得なかった。しかし前述のSK14～16の土坑より、更に大形の落ち込みをみせるものであることは確かである。その意味では前3者と性格の異なるものであるらしい。調査によって明らかにされた北端部の所見は、未掘部分と境する断面セクションによって、ある程度つかむことができるが、それによると、落ち込みの明らかにされた東西方向の上面径は、約280cmを記録し、覆土が4層からなる。第1層は黄褐色土約40cmで、小石、土器片等が混在し、その上部面には大きさが14×20×30cmから、25×27×50cmの大きな石が、数個覆う様に寄せ集められていた。これらの石は砂岩の平らたい石が主であった。第2層はその上面幅約260cm、堆積は淡い暗褐色土約53cmで、土器片や

土坑一覧表

No.	形状	大きさ cm	深さ cm	埋土	備考
2	楕円形	170×130	-25	暗黄褐色	上部、砂岩円礫50×30cm 3個 上部、割石2個
3	〃	205×140	-20	混合・カーボン小量	床面ほぼ平坦
7	〃 箱形に近い	140×100	-24	混合・黄褐色ブロック	土壙9を切る
9	楕円形	80×60	-20	〃 ・ 〃	土壙7・ピット94と切合い
10	〃 円に近い	90×80	-25	暗褐色土 黄土ブロック混る	
11	楕円形	150×93	-26	〃 〃	
12	〃	160×70	-28	黄褐色土	
13	〃	180×80	-15	〃 〃	17と切合い。小ピット状の落込みあり
14	円形	90×100	-100	4層よりなる	
15	〃	110×100	-120	〃 〃	上部に石あり
16	〃	110×120	-110	3層よりなる	上、中層に大小石あり
17	楕円形	120×100	-39	黄褐色ブロック混	13と切合い
18	〃	80×48	-20	黄褐色土 カーボン・ローム、ブロック混入	上部に角・円礫3個あり
20	不明	280×？	-153	4層よりなる	上・中層に大石10個南側調査区外のため未掘
21	楕円形	600×270	-108	7層よりなる	2号住居址・22と切合う 完形土器等遺物は多い
22	円形 フラスコ状	60×55	-50	暗褐色土 小礫混在	2号住と切会う。上部集石あり
47	楕円形	107×65	-16	〃 〃	54と切会う。床部に角礫7個
95	〃	83×60	-20	暗褐色土 黄褐色ブロック混	


第2号土坑
654.00
暗黄褐色土
第3号土坑
654.00
炭化物含有暗黄褐色土
第7・9号土坑
第7号
第9号
654.00
Ⅰ：黄色褐色土ブロック含有暗黄褐色土
第10号土坑
654.00
黄褐色土ブロック含有暗褐色土
第11号土坑
654.00
黄褐色土ブロック含有暗褐色土
第12号土坑
654.00
黄褐色土
第18号土坑
654.00
炭化物・ロームブロック含有
黄褐色土
第13・17号土坑
第13号
第17号
654.00
黄褐色土
黄褐色土ブロック含有
暗灰褐色土
第14号土坑
654.00
Ⅰ：小礫含有
暗褐色土
Ⅱ：黒褐色土
Ⅲ：黄色土ブロック
含有暗褐色土
Ⅳ：暗褐色土
第15号土坑
654.00
第16号土坑
Ⅰ：小礫多含暗褐色土 Ⅱ：暗褐色土 Ⅲ：暗黄褐色土
Ⅳ：暗黄褐色土
第20号土坑
654.00
Ⅰ：小礫含有暗黄褐色土
Ⅱ：黄褐色土
Ⅲ：暗褐色土
第22号土坑
654.00
小礫含有
暗褐色土
第95号土坑
654.00
黄褐色土ブロック含有
暗褐色土
第115号土坑
654.00
暗灰褐色土
第47号土坑
654.00
小礫含有暗褐色土
0
2 m

第15図　主要土坑

小礫が点在する。また第3層は、第2層内、第4層内にレンズ状に包含される黄土で、遺物等含まず、第2層内では厚さ15cmで長さ125cmを、第4層内では厚さ5cm、長さ60cmにわたり認められた。第4層は濃い暗褐色土で混在物はなく、その上面径約200cm、堆積は65cmを記す。以上の如くで、調査部分での断面形状は底の広い舟底状となり、最深部は153cmを記録した。巨大な落ち込みが推測されるが、その目的、性格等は不明である。

SK5　出土土器（第16図41～44）

SK5よりの出土土器で活用し得るものは41～44である。41は平縁の口縁が外反する厚手土器で、内外の壁調整および焼成はよく赤褐色となる。頸部に沈線区画による縄文帯を横走させている中期前半土器。42は縄文を施した胴部片。43は楕目状の沈線を縦方向に全面に施した後、まばらな平行沈線を、間隔をおいて横位に直行させている。平縁の口縁部で焼成はよい。44は磨消縄文を残す中期後半土器片である。

SK7　出土土器（第16図45～48）

活用できる資料は4例であった。45は器厚1cmの胴部破片で、貼布された短い横位の突帯上に爪形状を施し、その突帯の基部に密な連続爪形文を施している。46・47は共に平縁の口縁部で壁調整はよい。46は口縁部に幅広い無文帯をとり、横位の平行沈線をめぐらした後、その上に縄文を施している。47は微細な縄文を器全面に施し、口唇上を面取りしている。48は波状口縁の頂部を更に立体的に突起させた部分で、前後左右を穿孔させている無文土器である。46は中期前半、46・47は中期後半、48は後期初頭に所属されるものである。

SK14　出土土器（第16図49～62）

本土坑出土土器49～62のうち、49は平縁の口縁部破片である。口唇部外側に隆帯を加えるため、2～3cmの幅広の面がとられ器も厚い。内外の壁面は研磨され暗褐色となる。隆帯上に密な押引状の爪形文を連続させている。そしてこれに並行する平行沈線文をめぐらし、他を無文としている。50は器厚中位の赤褐色の焼きのよい土器である。隆帯区画の内側に爪形状の刺突を連続させている胴部片である。いずれも中期前半に所属する。

51～58は縄文と曲直の太沈線併用施文のみられる1群の土器である。総じて黄褐色系を示しいずれも中期後半でも、その初期に位置されるものであろう。59～61は底部破片である。共に黄褐色で網代底となる。59は底径7.8cmを示し、底部より直に立ちあがった後外反して開き、60は底径10.4cm、61は同10.8cmを示し、ゆるやかに外反して開口する。

62は平縁の口縁部破片で壁調整はよく、黄褐色で器厚0.5cmとうすい。磨消縄文のみられる後期初頭土器である。

SK15　出土土器（第16図63～67）

活用し得る土器は63～67の5例であった。このうち63～66は縄文の施された胴部片である。器厚は中位のもの多く暗褐色系をとる。縄文は総じて細かいが、なかでも66は無節縄文となっている。67は波状口縁部で内外の壁面調整はよく研磨されている。無文であるが口唇部を広くとり、波頂部

に凹文と沈線を1条引いている。

SK16　出土土器（第16図68～76）

出土土器の内容が多彩である。68は黄褐色の胴部破片、内壁の調整はよい。沈線の曲直線文を描き、空間を更に沈線文で充填している。69は縦方向の隆帯上に縄文の押圧痕をのこし、器面に縄文を転載している。70は口唇上を幅広くとり、1条の沈線をめぐらす平縁口縁で、縦方向の沈線区画内に縄文を施している。71も平縁の口縁部で、隆起上に軽い刺突文と沈線を横走させている。72は底部辺に近い破片、73は頸部片で内壁調整はよく、共に沈線区画内に縄文をのこしている。74は平縁の口縁片で、口唇外側を広くとり、1条の沈線を施し、その下部を横に浅く連続刺突している。頸部以下は無文である。75は無文の胴部に1条の微隆線を垂下させ、その上面に形のよい刻目を附している。76は磨消縄文土器片である。

以上のうち69は中期前半、68・70・73は中期後半、71・72・74～76は後期に位置さるべきものである。

SK20　出土土器（第16図77・78）

活用資料は僅か2例で、共に器厚0.7cmの胴部片である。77は平行する沈線区画内に、整った沈線を充填しており、78は整った縄文帯を斜行させている。中期中葉に位置されるものであろうか。

SK22　出土土器（第16図79）

79の1例である。器厚0.7cm黒褐色をなす胴部片である。整然とした平行沈線文・刺突文・押引文を併用した、中期初頭土器である。　（大久保知巳）

3．その他

(1)　自然流路

自然流路は、発掘地の南東部隅に僅かに姿をあらわす。流路の方向は西南より北東に通じており、SK14～16の走行線にそいながら近接し平行する流れを示す。検出面での流れの川幅は、約150cm前後であり、比較的浅く覆土は溝の断面セクションによると、1層と2層からなる。1層は約5cmの堆積で痕跡的であり、やや砂質で酸化鉄やマンガンを含む暗褐色土に、大は2cm、小は5mm程度の砂利、そして縄文後期前半を主とする土器片等が比較的多く混在していた。第2層は暗褐色土約15cmで、微量の小砂利と後期前半の土器片などを含む。

溝は人工的な手入れ部分が全くみられないところから、自然の流路として取扱ったが、溝内堆積の遺物から、縄文後期前半以降の流れであることがわかるし、長い年月にわたるものでなく、一時的でしかも砂利小礫のあり方から、流れが緩やかであり、水量もさほど多くはなかったものと推考される。

流路内の堆積物を除去すると、その下面に柱穴状のピットが、溝内に3箇所、溝の縁辺に1箇所検出される。これらが何を意味するのか、東部、南部が未掘部分にかかるため判然としない。また相互の配列が必ずしも整っておらず性格は不明である。その規模等を記すと、西より東へ向けて

SK132はSK14の南西部縁辺に接しており、上面径約45cm円形、下面径約30cm円形で、深さは約41cmを記し、SK133はSK132の東約85cmを隔て、上面径約40cm円形、下面径約20cm円形で、深さは約41cmとなり、SK134はSK133の東約60cm隔てて、上面径約52cm円形、下面径約25cm円形、深さは約62cmと深い。またSK135は、SK134の東南約28cmに所在し、上面径約45cm円形、下面径約21cm円形、深さ約46cmである。これらのピット類は、自然流路が形成される以前に営まれた遺構とみてよい。

自然流路内出土土器（第17図88～135）

自然流路内出土土器は、縄文中期初頭より中期後半、後期、晩期に含まれるものなど多彩である。88は器厚0.7cm、の胴部片で、輝雲母を含み赤褐色で焼成はよい。横走する隆帯上に整然とした刻目を連続させ、以下に整った撚糸文を平行垂下させている。中期初頭所属土器片である。89は輝雲母を含む黄褐色の明るい頸部片で、隆帯による渦巻文を描き、器面に刺突や沈線の施文を併用させている。90～97は器全面に縄文の施される1群の土器である。いずれも胴部破片で、器厚は0.7～0.8cmを示し、黄褐色系の焼成はよい土器である。98～102は縄文と沈線が併用される類である。このうち98は頸部片、他は胴部片で、器厚は中位、壁調整はよい。103は黄褐色の明るい胴部で、平行する隆帯垂下の区画をとり、綾杉文を施すらしい。以上89～103は縄文中期後半所属土器片である。

104～116は、沈線区画による磨消縄文をのこす1群の土器である。総じて黄褐色ないし黒褐色となり、壁面調整はよく、器厚は104～110までが0.9cm前後で厚く、111～116は0.6cmとうすい。116は平縁の口縁部がやや内湾する器形を示す。107の沈線区画内の縄文は痕跡的となっている。以上縄文後期前半所属と思われるが、この中111・115・116は後期後半に下降さるべきものかもしれない。

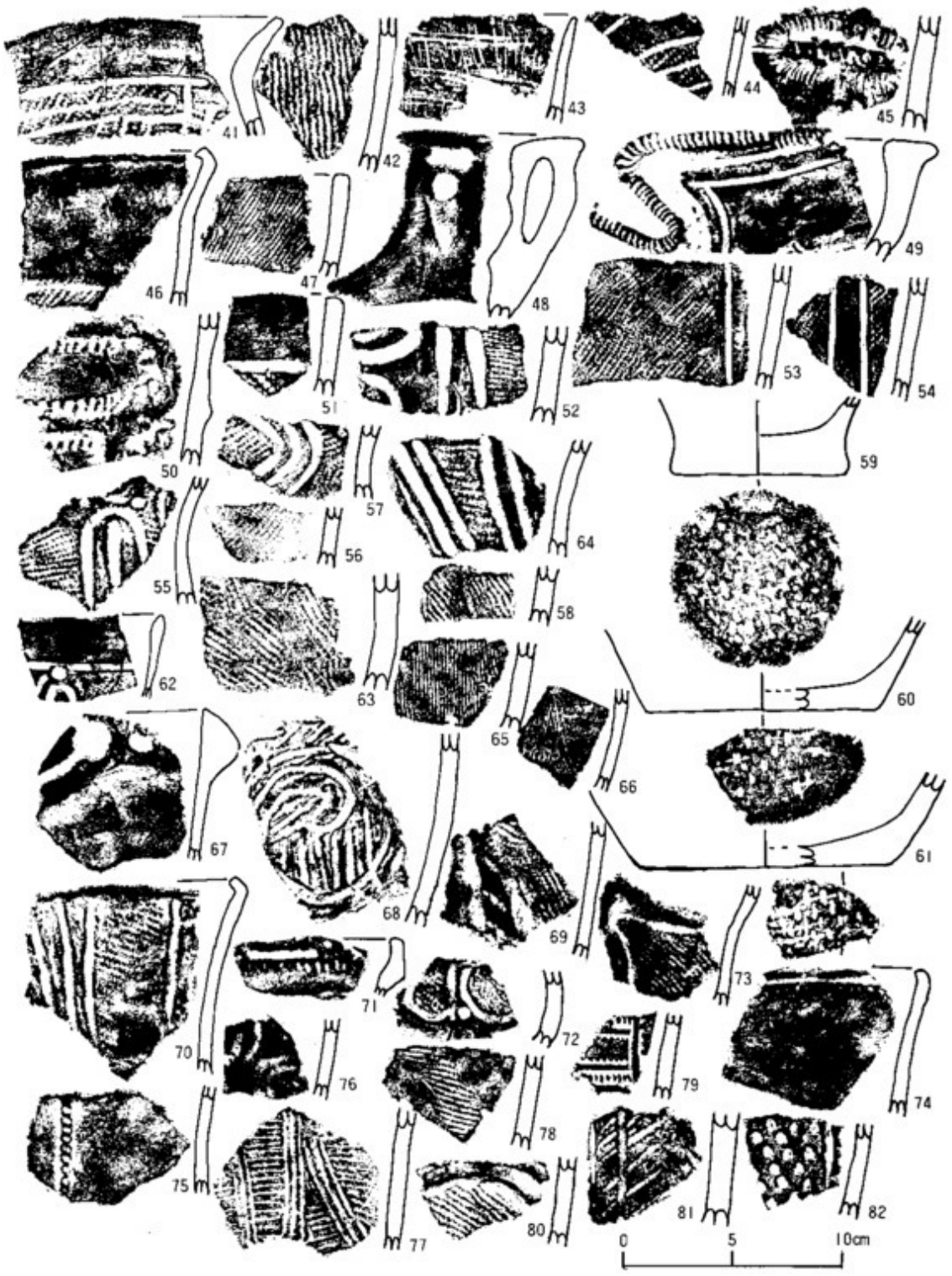
117～122はいずれも口縁部破片で、器厚は中位を示すものが多い。また壁調整はよく、概して暗褐色系の色調をとる。117・119・122が平縁を、他は波状の口縁となる。これらの土器に共通していえることは、口唇直下に幅広い太い凹帯を横走させたり、ゆるい凹線による渦文、あるいは円形凹文を残し、他を無文地とするか細かい縄文帯を1条凹帯に平行させている。類例はすくないが後期後半に位置さるべきものであろう。

123～131・133は、縄文晩期に比定され得る土器である。このうち133は網代底をもつ土器底部で、その底径は4.6cmと小さく、器厚は0.5cmの暗褐色を呈する無文土器である。器は底部より直に立ち上がった後、外傾する器形を示している。123～131は128の頸部を除き、いずれも平縁の口縁部破片で、器厚は全般に薄く黄褐色ないし暗褐色となる。施文は沈線を口縁部に横走させたり、微隆上に円形の軽い押圧文を連続させ平行させたり、他を無文とする場合が多い。134・135は底部片である。134は底径9cmの網代底であり、135は底径11.2cmで共に赤褐色の無文土器を示す。器はいずれも基部よりゆるやかに外反して開口する。

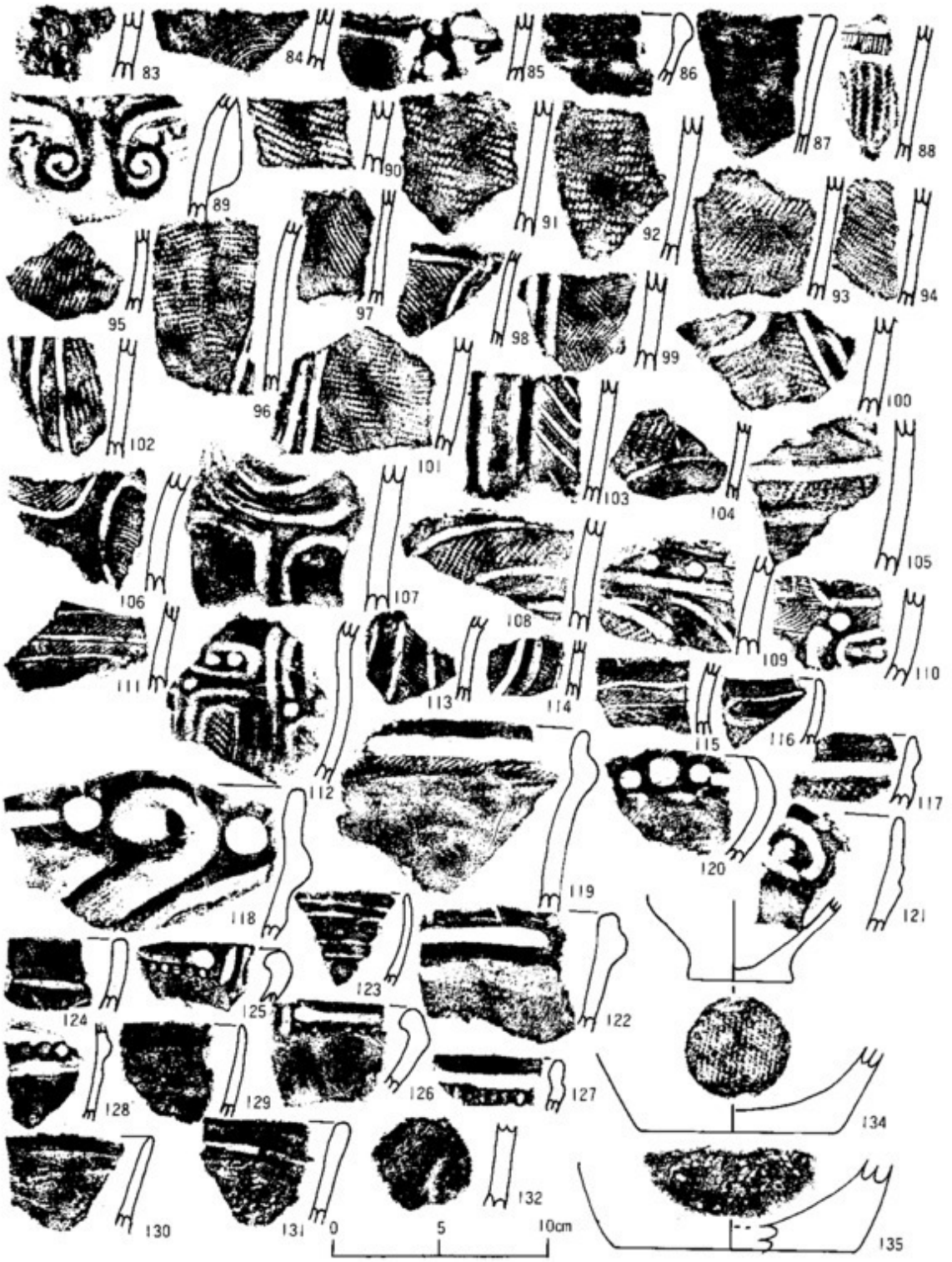
132は唯一の土製円盤である。赤褐色で無文、厚さ1cm直径4.5cmの円形を形づくる。本来は土製品として取扱うべきであるが、他に類例がなく土器片の再加工品であるため、この項で取扱った。

(2) ロームマウンド

1号竪穴住居址の東南部に近く発見された土坑状の落ち込みであり、当初は1号土坑、2号土坑



第16図　SK土坑５・７・14・15・16・20・22号・ロームマウンド出土土器



第17図　ロームマウンド・自然流路内出土土器

とされた。しかし調査が進むにしたがって、人工的な遺構とする条件がうすらぎ、最終的には、自然によって大地に刻まれた、裂け目ないしは穴としての性格が強いものであることを知る。依って当初付された1号土坑、2号土坑は、自然形成の1連のものとして解消する。

裂け目はやや大きな楕円状をなして溝状にめぐるため、その内部にとり残された部分も楕円状をなし、溝外より約20cmの盛りあがりをみせた。その規模は東西約250cm、南北約210cmのローム マウンドを残す。この自然形成遺構の命名の由来も、そんなところにあるわけである。

溝状の裂け目ともいうべき落ち込みは、中央部に残されたマウンドより西側で約180cmの幅となり、深さは約20cm、北側は約140cm幅で、深さは約55～85cm、東側は約60cm幅で、深さ約30cm、南側は約30cm幅で、深さは34～52cmと深浅の差があって、いずれも裂け目は内部の中心部に向かって、斜めにくい込むかたちをとっている。マウンドは東西方向の上面径が約430cm、南北方向は約380cmを記録する。

この様な意味のなかなかつかみにくい自然遺構の事例は、長野県埋蔵文化財センターで調査した明科の北村遺跡にも発見されており、北側の深い落ち込み部分は、巨木が強風にあおられて根がゆさぶられ、土の盛りあがりと地の裂け目がつくられ、後、黒土が落ち込みに入り込んだのではないかとの見方がなされている。

この落ち込みの北側の断面セクションによれば、第1層が暗褐色土で約95cmの堆積を示し、縄文中期土器片など遺物を若干含み、第2層は中央部分にみられ、第1層の上部に堆積するロームに、淡い暗褐色土の混りがあり、第1層内に包含されて70cmの堆積を示していた。

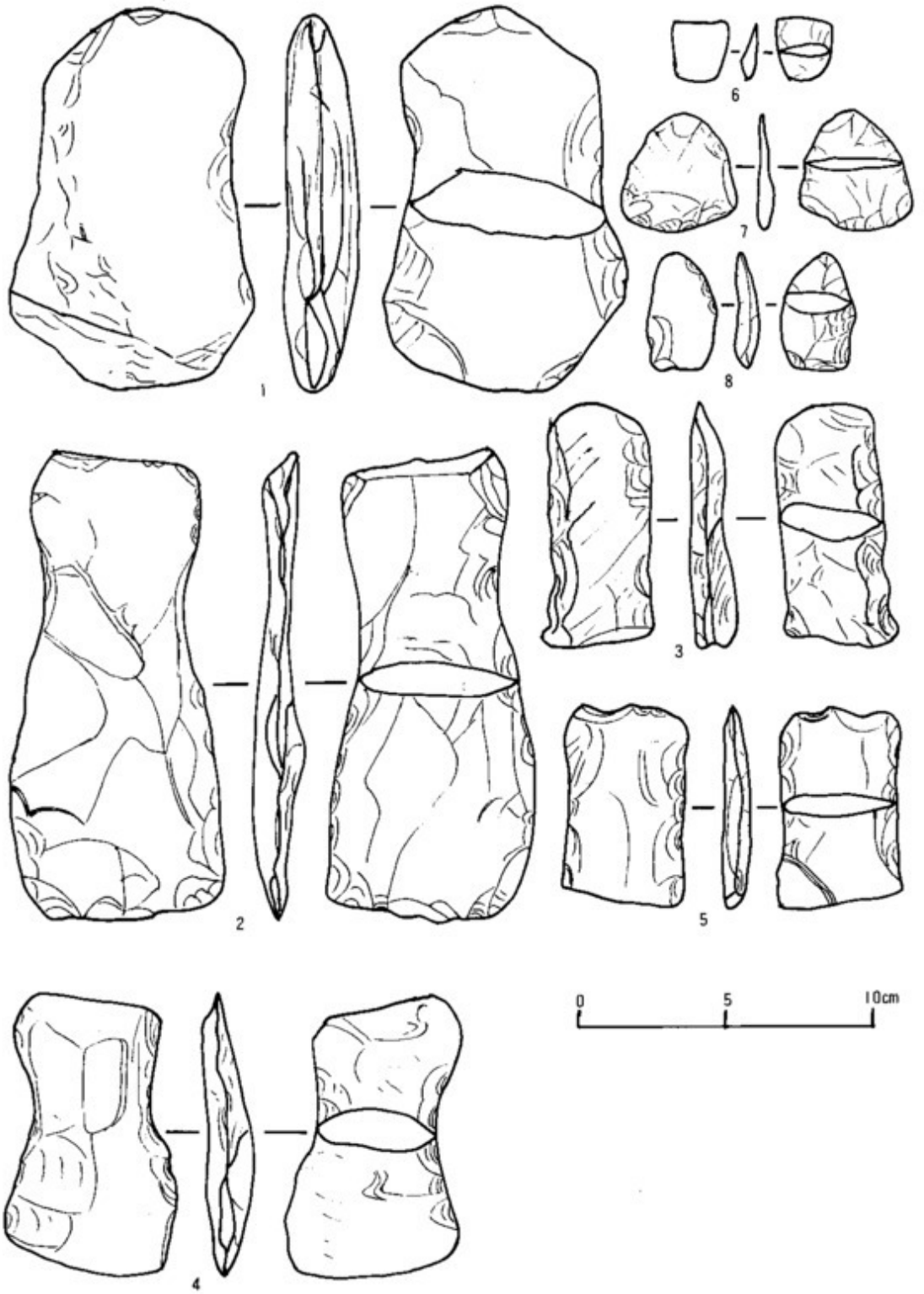
ロームマウンド出土土器（第16図80～82）、（第17図83～87）

ロームマウンド内出土の活用土器は8例を数える。80は壁調整のよい胴破片で、隆帯区画内に縄文を施し、81は縦位と斜位の沈線を交叉させており、82は小豆大の刺突文を、器の全面に整然と施している。83はいわゆる刺突された雨だれ文を残し、84は同心円の櫛目状沈線文をのぞかせている。85は縦横に隆線を貼布し、両者の交叉部分の基部に、刺突による8字状文を残している。86、87は共に無文の平縁の口縁部破片であり、86は口唇部を肥厚させており、87は変化のない底部へ直行する器形を示している。以上がロームマウンド出土土器である。このうち、80～84は中期後半所属土器であり、85～87は後期初頭に位置される土器である。

石　器（第18図1～8）

本遺跡の土坑、ロームマウンド、自然流路内出土の石器は、都合8点であった。内訳は1～5が打製石斧で5個、6は磨製石斧で1個、7、8はスクレーパーで2個である。

1はSK15出土で粘板岩製、大きさは長さ13.2×最大幅8.4×厚さ2.5cmで重量感があり、2、4共に撥形を示す。2は3、6と共にロームマウンド出土であり、大きさは16.3×7.2×1.6cmの硬砂岩製で1、4と共に完形品である。3は5と共に欠損品で、いずれも蛇紋岩製である。大きさは8.5×4×1.5cm、4は5、8と共に自然流路内出土、硬砂岩製で片面に自然面を多くのこしており、大きさは10×6×1.5cmのやや小形を示す。5は大きさ7×4.2×1cmで偏平である。6は蛇紋岩製とみ



第18図　土坑・ロームマウンド・自然流路内出土石器

られる小形磨製石斧の刃部辺の欠損品で、大きさは2.2×２×0.5cm、７はSK16出土でチャートのスクレイパー。８は硅岩のスクレーパーで、大きさは共に約４cmの小形で、縁辺に調整痕をのこしている。（大久保知巳）

(3) 焼土遺構

第２号住居址がその上部輪郭を明らかにしない時点、発掘地のＥ９、Ｎ６の区画内の上部検出面に、焼土遺構が認められた。第１層黒色耕土下に発見されたもので、その分布範囲はやや広く、ほぼ115cm円形を示した。焼土の断面観測によれば、赤褐色を帯びるその堆積は、多少波があるものの、中央最深部において約15cm認められ、以下の黒褐色土に通じていた。遺物等は縄文中期中葉相当の土器細片が若干出土する。

焼土検出に伴い、周辺地域を精査し結びつく関連遺構の検出につとめたが、住居址や土坑等他にかかわるものを発見できなかった。（大久保知巳）

(4) 集石遺構

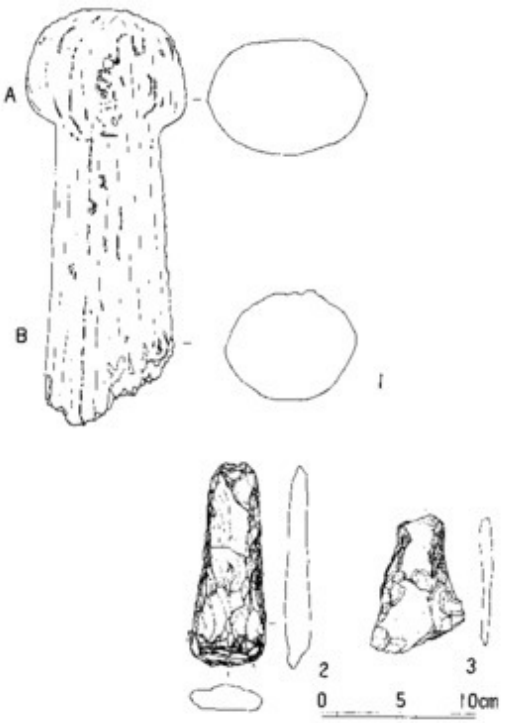
発掘地のＥ６・Ｎ６区画内の、黒色耕土下の検出面に集石が認められた。それらは輪郭にまとまりや整然さをもつものでなく、集石とはいうものの洗い出された全体の感じでは散在的であった。分布範囲は南北190cm、東西185cmの円内におさまり平面的である。石は５cm前後のこぶし大から、15×20cm前後の人頭大のものでしめられ、個数は80個をこえる。これらの石礫に混り、縄文中期土器片若干と石器フレイク等が混在する。集石を性格づける資料は得られなかった。（大久保知巳）

第３節　遺構外の遺物

石　器（第19図）

取り上げた石器は３点で、石棒１点、打製石斧２点（内１点は欠損品）である。

石棒（第19図）１は、大型石棒で頭部にくびれがある有頭のもので、頭部はやや楕円形に近く胴部はくびれ部から中央に向かって徐々に太く作ってある。断面楕円形で胴部最大径は欠如した基部にあるものと思われる。頭部最大径はくびれ部の直上で10.6cm、胴部残存最下部径は8.7cm、頭部長さ８cm、遺存全長27.5cm重さ3800ｇを計測した。風化を受けているものの、作成当初は全体に研磨が行き届いていたものと推測される。石質は緑簾石片岩で、変成岩である。淡い緑色で、片状である。産地は上伊那郡長谷村付近を中心とした南アルプス（赤石山地）周辺であると言われている。交易によりもたらされたもので、形状からしておそらく縄文後期に比定し得るものと考えられ、３号敷石住居址の北側ローム上面での発見の所見から或いは３号敷石住居址との関連も考えられる。



第19図　石器（石棒・打製石斧）

打製石斧は第２号竪穴住居址から発見された。（第19図）２は、石材は粘板岩で、平面形は短冊型。刃部に使用による摩耗線状痕が見られる。長さは13.3cm、幅は4.7cm、厚さ1.7cm、重さ103ｇ。３は、安山岩で基部より刃部へ向かい広がるタイプと思われるが、欠損品なので形状・その他についても不明である。残存部重さ49ｇである。　（三村肇・澤谷昌英・塩原久和）

第4章　結　　語

葦原遺跡は、過去12回にわたる松商学園高校による調査、そして開発に伴う緊急発掘調査がなされている。その結果、縄文中期から後期にわたる遺構、遺物を中心に、古代あるいは中世所属の遺構、遺物が検出されており、敷石や竪穴の住居址、各種土坑類、埋甕、釣手等土器類、土偶、石棒等特異なあり方や、豊富な資料が得られていて、町内は勿論、県内識者に広く知られている。そんなところから、重要埋蔵文化財を包蔵する遺跡として注目され、県段階の史跡に指定さえなされている。

今回、同遺跡地の開発に伴う持前の発掘調査が、関係機関より要望され平成2年晩秋実施されるにいたった。発掘地は、過去10余回におよぶ既調査地域からはずれた場所であり、畑面での表採遺物も目立ち、重要性をおびる遺跡でもあるところから、発掘は今いずこの遺跡調査でも採用されている、面的なメッシュ方式をとり、限られた範囲内を全面に明らかにする。

その結果、遺構として縄文中期相当の住居址3軒、巨大ピット遺構、小ピット群等検出され、他に自然流路、ローム マウンド等発見される。また遺物の面では、縄文中期土器、後期土器を主とする土器類や、石棒、打製石斧、凹石等の石器若干が得られた。全体から受ける感じでは、葦原遺跡の該期集落の中心からはややはずれた、縁辺に位置した遺構、遺物の感じを受ける。

縄文中期の竪穴住居址のうち、第1号住居址は無敷石の柄鏡型竪穴住居址で、約3m円形の小形を示し、該期の住居址に一般的である址内に主柱穴をもたず、壁周にさして太くない柱を何本もめぐらして、竪穴中央上部で集約する、上屋が円錐形となるであろう、変わった構造を推考させる。また石囲炉をもたず地床炉もこじんまりとし、床面がさほど固くない点や、西側はり出し部の北に接して、石棒状の自然石が倒れていたなどの事情等から、一般的な住居とは異なる用途があったのではないかと思わせる。第2号住居址は、直径約420～430cm円形の竪穴を示すが、これに巨大なピットが複合し、その様相は複雑である。炉、床、周壁等、主体的な部分が失われているため、多くを語り得ない。

第3号住居址は、柄鏡形の敷石住居址である。今回の調査で対象となったせまい地域内から、はからずも発見されたものである。葦原では過去の調査でも柄鏡形敷石住居址が発見されており、またその数を増すことになった。

柄鏡形住居址は全般的な傾向として、年代的には縄文中期末近くより、同後期前半にかけて盛行し、後期後半から晩期前半において終息する傾向をみせている。またその分布範囲も、主として関東から中部山岳地方を中心に、分布することが知られている。類型的には主体部と柄部との平面形状から、大別して円形長柄型、円形短柄型、方形長柄型、方形短柄型が知られており、前二者に含まれるものが、後二者よりも圧倒的に多い。そして年代が下降するに従い変化をみせる。形状として柄鏡形を示すもののなかには、敷石のあり方から更に、(1)址内全域に敷石が認められるもの、(2)

址主体部のみに敷石が認められるもの、(3)柄部にのみ敷石が認められるもの、(4)敷石が全く認められないものの大別4分類が可能である。

今回の葦原遺跡発見例では、第1号柄鏡形竪穴住居址は敷石を全く認めない部類に含まれる。柄鏡形の敷石住居址は県内では類例が多いものの、ほぼ同期に相当する無敷石の柄鏡形竪穴住居址はすくなく、盛行期におけるものとして稀少の資料を提供したといえる。同類の住居址は、茨城、千葉、神奈川県地域に多く偏在分布し、中部の内陸山地域には殆ど知られていない現状にある。また第3号柄鏡形敷石住居址は、柄部、主体部共敷石を認め住居址とするものの、反面、規模は小さく生活には不向な場が感ぜられ、獣焼骨片の存在は霊送りや豊猟等祈願のための、祭祀専用施設ではなかったかとも推考される。なお葦原遺跡から、かつて検出されている柄鏡形敷石住居址からは、埋甕に小形コップ状の無文土器が収納されていた事例があり、本地よりいずれも大型で、年代的にも先行する住居址と考えられる。

巨大ピットはSK14・15・16号および20号・22号が該当し、21号を除いて他は直列上に発見された。ピット内の覆土や出土遺物などから、縄文中期後半所属と判断される。しかしその延長線上の前後左右が、いずれも未掘部分にかかるため、多分に、ある施設の1部分的な感じを受けるが、それ以上のことはわからず、またそれぞれがそれ自体、独立した機能をもつものかどうかについても、判然とつかみ得なかった。また21号は第2号住居址と複合状態にあり、その両者のからみは複雑であるが、個体のまとまった称名寺式系の後期初頭土器を出土しており、今後に活用し得る良好な資料を得たといってよい。

遺物のうち、発掘開始当日、第1層黒色耕土下部より発見された石棒は、権威者の鑑定結果によれば、材質は緑泥石片岩（いわゆる三波石）で上伊那郡長谷村杉島の産であり、中信地区には産出しないことがわかった。石棒表面の風化が進んでいるが、製成当初は研磨されてあったものと思われるとのことである。この石棒は先端部を欠いており、現存の総長は26cm、基部にくびれをもち、その球部は横幅10cm、長さ7.5cmとなる。棒状部の太さは直径が6.5～9cmである。

近年、県内のいずこの山野でもめまぐるしい開発が展開されている。そしてそれに伴う持前の埋蔵文化財の発掘調査がなされている。松本、塩尻、大町、安筑の野はいうに及ばず、日程を重複しながら場所を異にし、同じ自治体の調査主体が対応できない程、四季を通じ目白押しの取組と作業がなされている。そのため発掘について、調査を担当し得る有識者はすべて動員され、これにあたるという現状でもある。

今回の葦原遺跡の調査は、右の様な事情下で調査員にゆとりなく、発掘に先だつ調査団組成段階で、全くその見通しもたたず苦慮難行を極めた。その様な中で町当局者よりくり返し熱心な調査の依頼を受ける。私的なことであるが勤めの身で、もとよりその責任を全うし得る自信はなかったが、その後、苦境窮状を知って援助に御理解を示された、青沼、三村、百瀬各氏の協力を得、また余暇をさいて協力下された考古関係者、そして当初より終始調査に御協力下された町当局者、および教育委員、文化財保護委員各位、御協力下された地元他多くの方々に対しまして、衷心より深甚なる

謝意を表する次第です。

なお末筆ながら調査終了後、報告書の執筆事務につかれた調査員の百瀬陽三氏が、おもわぬ病におかされ、翌平成3年の初冬急逝されました。さぞ御無念のことと拝察いたします。ここに調査団を代表して生前のお力添えを深謝し、ひたすら御冥福をお祈りいたします。　　（大久保知巳）

参考文献

①塩尻市柿沢東遺跡塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書　1984

②長野県東筑摩郡波田村葦原遺跡第1次・第2次調査概報　小松　慶　信濃18－4　1966

③縄文時代における柄鏡形住居址の研究－その発生と伝播をめぐって－（1・2）　本橋恵美子　信濃40－8・9　1988

④敷石住居址出現のもつ意味　上・下　山本暉久　古代文化（28－2・3）　1976

⑤長野県更埴市屋代遺跡群5ｂ地区現地説明会資料　1993．05．23　㈶長野県埋蔵文化財センター　長野調査事務所　1993

⑥大村塚田遺跡　松本市文化財調査報告No.96　1992

⑦ほうろく屋敷遺跡　明科町の埋蔵文化財第3集　1991

⑧梨久保遺跡　中部山岳地の縄文時代集落址第5次～第11次発掘調査報告書　1986

⑨神奈川県下北原遺跡　神奈川県埋蔵文化財調査報告14　鈴木保彦他　1977

⑩群馬県田篠中原遺跡　縄文時代中期末の環状列石・配石遺構の調査　群馬県埋蔵文化財調査報告第112集　関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財調査報告書第5集　1990

報告書抄録

書名（ふりがな）	波田町葦原遺跡緊急発掘調査報告書　II
編著者名	大久保知巳・三村肇・青沼博之・平林彰・澤谷昌英・塩原久和
編集機関	波田町教育委員会
所在地	〒390－14　長野県東筑摩郡波田町4417－1
発行年月日	西暦　1995年　1月31日
所収遺跡	葦原遺跡　所在地　長野県東筑摩郡波田町字葦原
コード	市町村（4498）遺跡番号（3）
調査期間	1990．11．12～28　調査面積　350㎡　調査原因　集合住宅建設に伴う事前調査
所収遺跡名	葦原　種別　集落　主な時代　縄文時代（中期～後期）
主な遺構	竪穴住居2軒（柄鏡形住居1）　敷石住居1軒　溝1条　特殊大土坑4基　その他土坑
主な遺物	一括土器8点・後期初頭土器（称名寺Ⅰ式・他）、他中期（勝坂Ⅱ式－藤内Ⅱ式）～後期堰の内Ⅱ式迄の縄文土器、ほぼ完形と考えられる石棒・その他石器
特記事項	上器埋葬施設と考えられる一括土器を出土した大型楕円形土坑1軒を発見。 柄鏡形竪穴住居1軒、矮小部分敷のほぼ完全な柄鏡形敷石住居1基を発見。 並立する3基の大型円形土坑を調査区の東南隅部に発見、遺構の一部分？

信越地方の主な称名寺式土器及び伴出（一括）土器分布図一覧表

日本海側　信濃川水系

No.	遺跡名	所在地	立地、出土遺構、他	文献	発行・年
1	城之腰遺跡	新潟県小千谷市山谷城之腰(1)	段丘　R24 p30（一括）	新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集城之腰	新潟県教育委員会1991
	〃	〃　(2)	〃　T26-p86	〃　〃	〃 〃
2	水上遺跡	新潟県南魚沼郡大和町本沢(1)	扇頂　土坑第1（一括）	水上遺跡・大和町文化財発掘調査報告第3号	大和町教育委員会1988
	〃	〃　(2)	〃　蓋型土器	〃　〃 第4号	〃 1990

日本海側　千曲川水系

No.	遺跡名	所在地	立地、出土遺構、他	文献	発行・年
3	林之郷遺跡	上田市林之郷境畑	段丘　第33号土坑	上田市文化財調査報告書第17集林之郷・八千原	上田市教育委員会1991
4	雁石遺跡	小県郡真田町長・戸沢・石舟	山麓	雁石・藤沢（国道144号線バイパスに伴う調査）	真田町教育委員会1975
5	大仁反遺跡	小県郡長門町岩井	平地　埋設土器	大仁反遺跡　大仁反遺跡発掘調査概報	長門町教育委員会1987
6	古屋敷遺跡	小県郡東部町称津古屋敷	扇央	不動坂・古屋敷遺跡群(2)	東部町教育委員会1986
7	栗毛坂遺跡	佐久市栗毛坂	段丘　372土坑（墓坑）a副葬品、b伏せかめ	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—栗毛坂—	㈶長野県埋蔵文化財センター1991
8	宮平遺跡	北佐久郡御代田町豊平宮平	段丘	「長野県北佐久郡宮平遺跡出土の後期縄文土器」川島雅人、前原豊	信濃III27-4
9	滝沢I遺跡	北佐久郡御代田町塩野	台地　J3号住（祭り屋？）石組内出土	滝沢・塩野西群、発掘調査概報（8次）	長野県御代田町教育委員会1993
10	西片ケ上遺跡	佐久市香坂小屋場	段丘　第1号敷石住、加曽利E式土器	佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集	佐久市教育委員会1987
11	茂沢南石堂遺跡	北佐久郡軽井沢町茂沢(1)	段丘　J3号住、加曽利E式土器	軽井沢町茂沢南石堂遺跡調査概報（8次）	軽井沢町教育委員会1981
	〃	〃	〃	軽井沢町茂沢南石堂遺跡調査報告（総集編）上野佳也（編）	軽井沢町教育委員会1983

日本海側　犀川水系

No.	遺跡名	所在地	立地、出土遺構、他	文献	発行・年
12	下中牧遺跡	上水内郡信州新町中牧	段丘　第57号土坑	下中牧遺跡	信州新町教育委員会1990
13	塩田若宮遺跡	東筑摩郡明科町東川手	台地	明科町史　明科の縄文時代・三好博喜	明科町教育委員会1984
14	一津遺跡	大町市東海ノ口　一津	山麓	一津	大町市教育委員会1990
15	北村遺跡	東筑摩郡明科町光・北村・中条	段丘　SH1228（墓坑）人骨の頭部に被せられていた。	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書No.11、北村遺跡	日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会、㈶長野県埋蔵文化財センター1993
16	草原遺跡	東筑摩郡波田町三溝草原	段丘　第21号土坑（一括）	草原遺跡緊急発掘調査報告書2	波田町教育委員会1994

17	麻神遺跡	東筑摩郡波田町下波田	扇央　(麻神遺跡〔第1次〕1972　波田村教委)、	長野県史考古資料編・遺構・遺物	長野県史刊行会1988
18	荒海波遺跡	南安曇郡梓川村上野・田家・松地段丘端	第1号竪穴	荒海波遺跡発掘調査報告書	梓川村教育委員会1977
19	くまのかわ遺跡	松本市笹賀上二子	平地　遺構外（一括2点）	松本市くまのかわ遺跡	松本市教育委員会1982
20	三夜塚遺跡	東筑摩郡山形村下竹田	扇央　重機にて整地中に出土　（個人蔵）	（実測図　三村肇）	1994
21	熊久保遺跡	東筑摩郡朝日村小野沢熊久保	段丘	長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報（1-2）樋口昇一、横山正、小松虔	信濃III16 4-7
22	大村遺跡	松本市大村カラシ畑	平地　流土、伏せ状態で出土　横田作重氏寄贈	（実測図－平林彰）	財松本市立考古博物館1992
23	平出遺跡	塩尻市宗賀平出	平地　J5号住（一括）	史跡、平出遺跡	塩尻市教育委員会1987
24	大原遺跡	塩尻市片丘	台地　5号土坑	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2	長野県埋蔵文化財センター1988

日本海側　姫　川　水　系

主要な交易路（ヒスイ・ロード）現塩の道、姫川流域には縄文後期の遺跡が点在するも、現在迄の処、器形及び文様の明確なる称名寺式期の大型土器片が確認されていない。

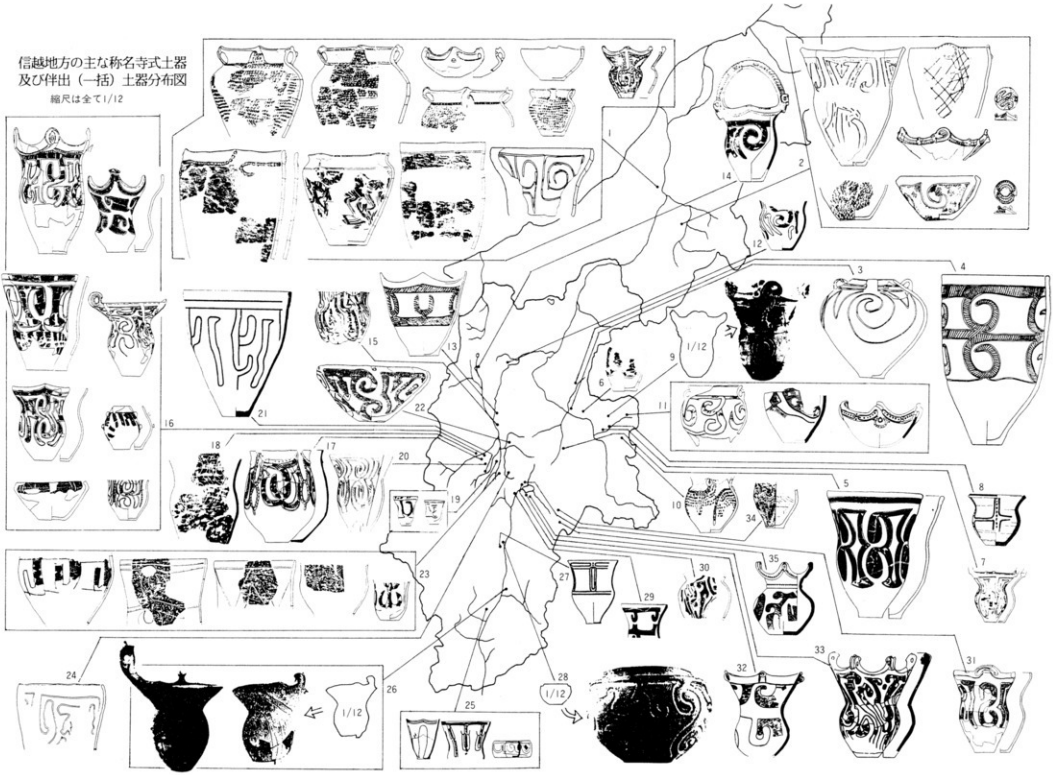
太平洋側　天　竜　川　水　系

No.	遺　跡　名	所　在　地	立地、出土遺構、他	文　　献	発行・年
25	瑠璃寺前遺跡	下伊那郡高森町市田大島山	扇央　3号住（一括）	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書、下伊那郡高森町地内その1	長野県教育委員会1972
26	北原遺跡	上伊那郡中川村大草北組・中組北組	段丘	A，縄文土器大観－4（後期）小学館1989、B，中川村史－52P	中川村教育委員会1966
27	井の久保遺跡	伊那市西春近井の久保	段丘	上伊那の考古学的調査　林茂樹・大田保－	伊那市教育委員会1966
28	今泉遺跡	伊那市山寺	丘陵	伊那市史－歴史編（第3節土器文化の発展）飯塚政美	伊那市教育委員会1984
29	長塚遺跡	岡谷市新倉	扇央　8号住　長塚遺跡		岡谷市教育委員会1971
30	西林A遺跡	岡谷市神明町	山麓　遺構外	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－1	長野県埋蔵文化財センター1987
31	梨久保遺跡	岡谷市長地中村	扇状地　屋外埋甕　梨久保遺跡		岡谷市教育委員会1986
32	十二の后遺跡	諏訪市豊田有賀	扇状地　土坑66	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書、諏訪市その4	長野県教育委員会1976
33	大安寺遺跡	諏訪市湖南北真志野	台地	編年（中部高地に於ける型式－旧石器、縄文、弥生）大安寺式土器　百瀬新治	千曲川水系古代文化研究所1980
34	恩膳遺跡	諏訪郡原村払沢・恩膳	丘陵　現設土器　恩膳遺跡		長野県原村教育委員会1988
35	穂久利遺跡	諏訪郡富士見町宮原	山地　4号住	井戸尻（後・晩期の縄文式土器群都）	1965

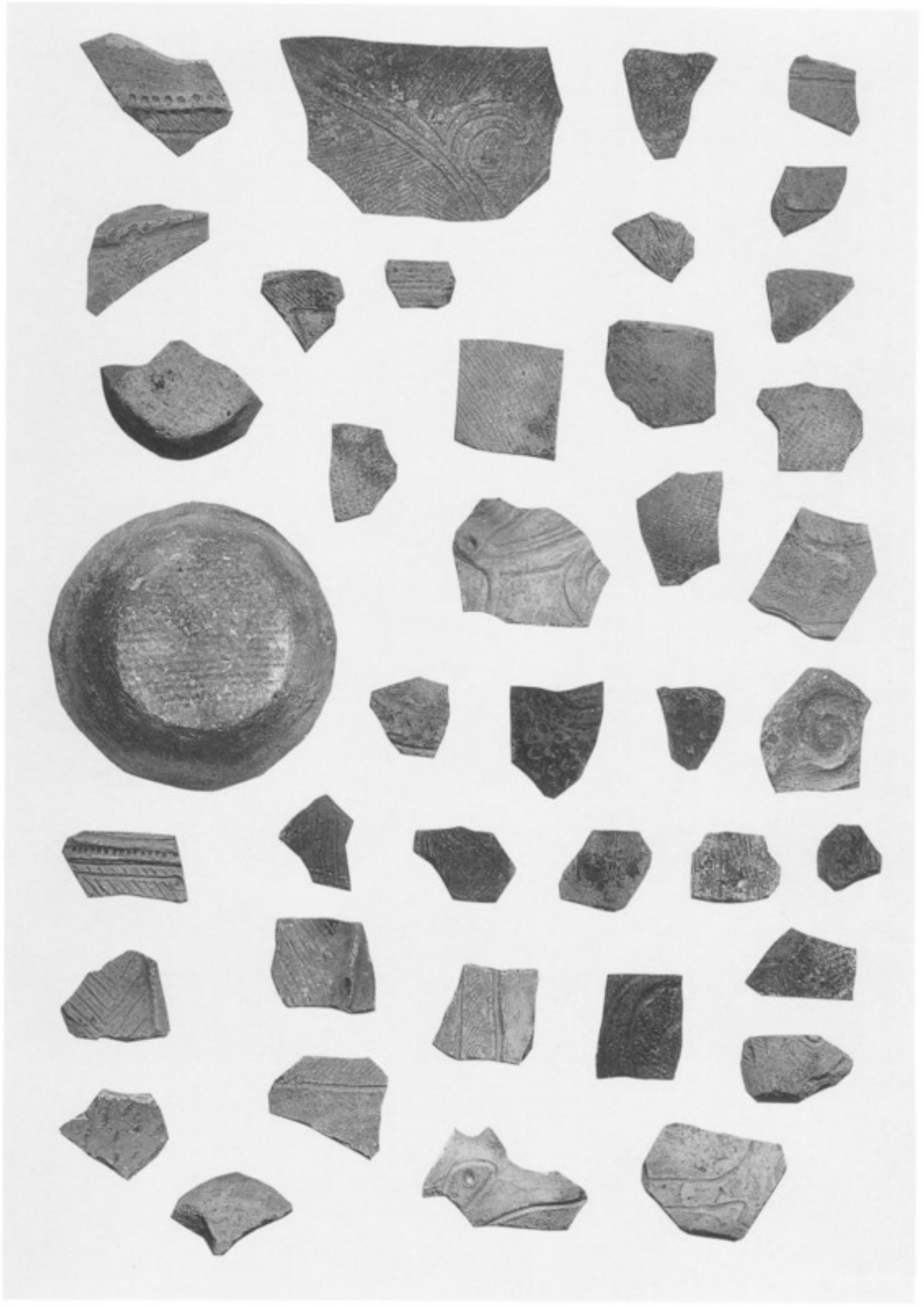
太平洋側　木　曽　川　水　系

重要な西日本との土器文化相互伝播ロードと推定されるが、現時点で木曽谷に分布する縄文後期遺跡から発見されている称名寺式に相当する土器は、いずれも小片で資料とし掲載出来るものはなかった。姫川水系、木曽川水系は今後に期待したい。

高写真のみの場合は器形と大きさに重点を置いた。

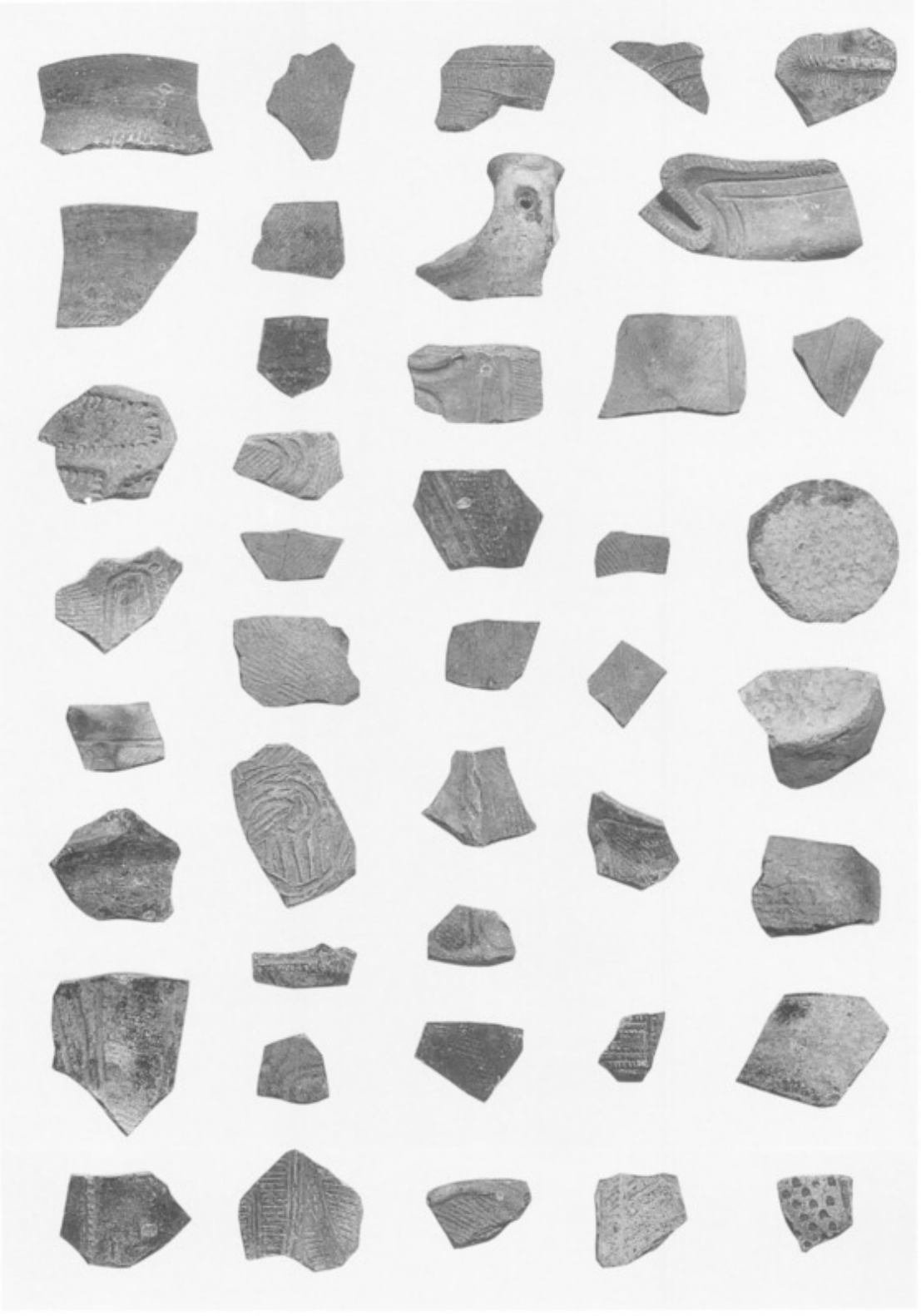


第20図　信越地方の主な称名寺式土器及び伴出（一括）土器分布図

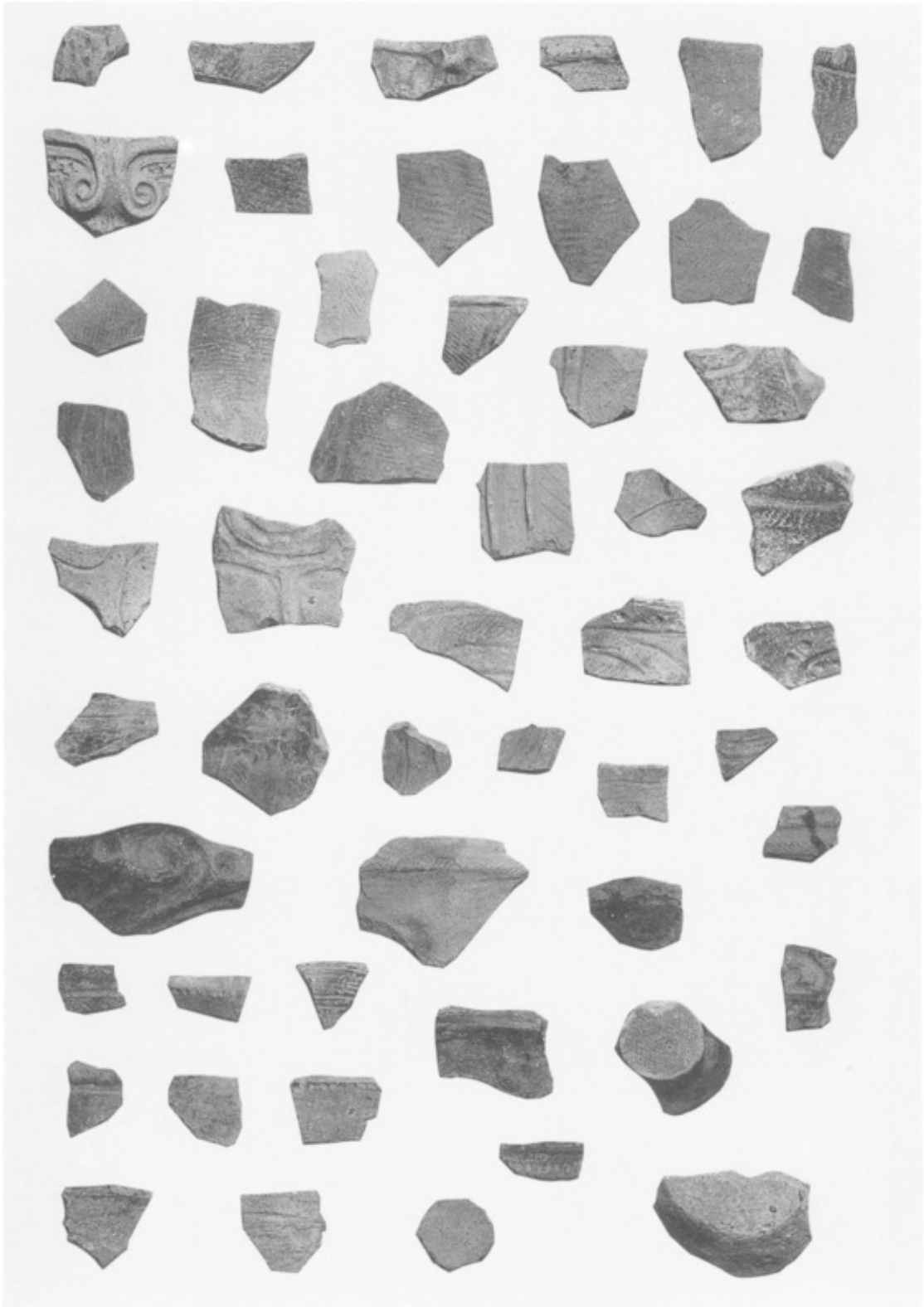


第1号住居址出土土器

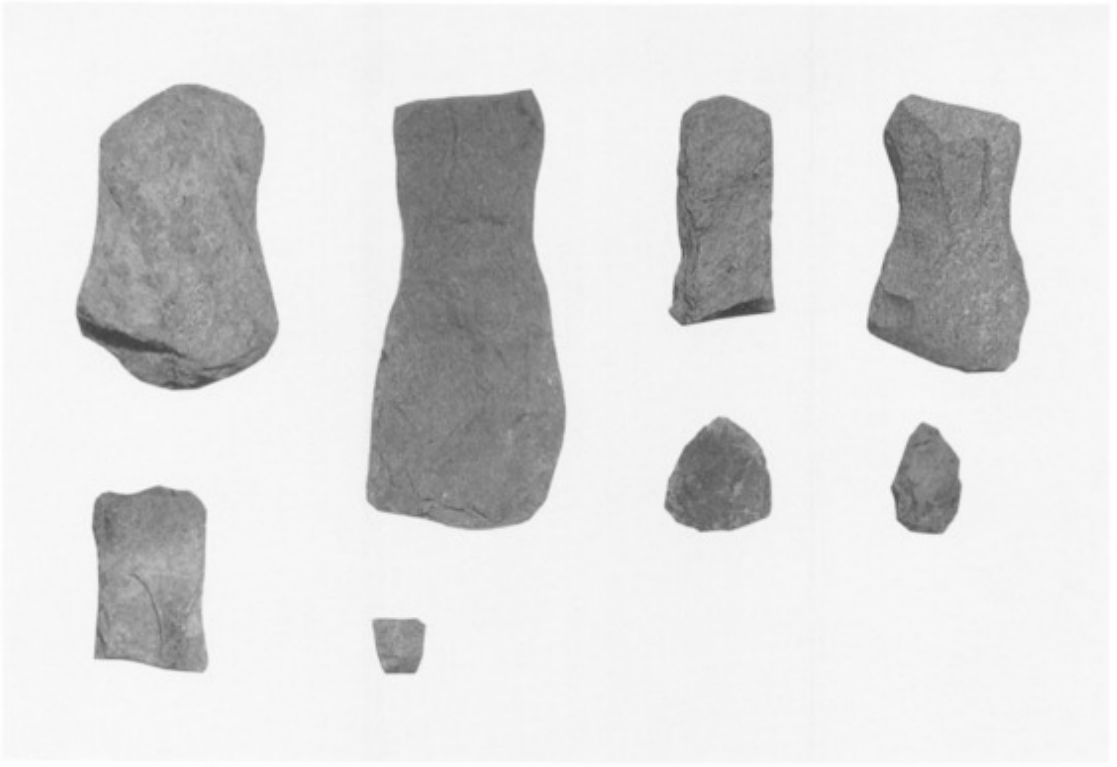
図版　2



土坑5・7・14・15・16・20・22号・ロームマウンド出土土器



ロームマウンド・自然流路内出土土器



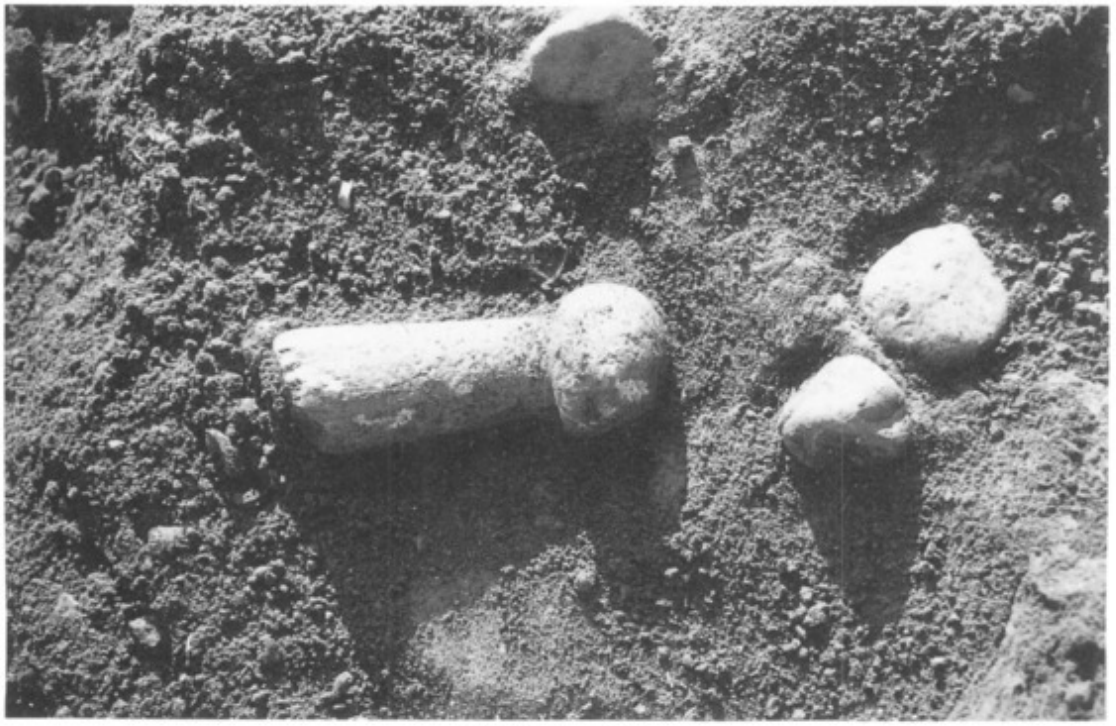
土坑・ロームマウンド・自然流路内出土石器

土坑14・15・16号

21号土坑出土土器

図版　6

21号土坑出土土器



遺構外出土の石棒

葦原遺跡 II

—緊急発掘調査報告書—

平成7年1月31日発行

編集
発行　長野県東筑摩郡波田町4417－1
波田町教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社